

淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十二年十一月廿日印刷納本昭和十二年十二月一日發行

第三卷 第十二號



二十月號

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ポバラルビ付
美麗クロース装
定價六十錢
(送料六錢)

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を悩ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると信じて、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝公園二十五號地
振替東京八二一八七

◇ 隣人の友社 ◇ 發行所

謎のアシロ

新舊のアシロ全貌

昇曙夢 著

壓倒的 價 四六判三五〇頁
發行 壹圓五十錢
送料十四錢

世界の怪奇
苦悶ロシアの
徹底的解剖

現今の複雑なるソ
聯の性格は、その建
國ロマノフ王朝
以來の矛盾相剋せる
二元的民族心理を
知らずしては不可解

見よ！戀の
花・殘虐の
嵐・革命の
血・偽瞞の
舌等その明
暗多彩なる
習癖を。

目次要項 1 文明史上の畸形兒(十八項) 2 ロ
マノフ王朝没落の悲劇(十七項) 3 ロシア國
民性の解剖(十五項) 4 民俗風習の特異性(十
三項) 5 革命前奏曲(五項) 6 過渡期のソ
エート社會相(十四項) 7 明暗モスクワ新風
景(十項) 8 五年計劃下の社會情勢(七項) 9
宗教弾壓を繞つて(七項) 10 恐怖政治の裏面
(八項) 11 反革命陰謀物語(九項) 12 問題のソ
聯巨頭論 II スターリンとトロツキイ(九項)

後藤朝太郎 著 價 四六判 三〇〇頁
壹圓卅錢 送料十二錢 (群書中)

支那の男女

支那現代の生活相

この著者にして始めて語り得
る現代支那の真相。茫漠・
徹底・獵奇と、支那の體臭、
芬々として讀者を魅了する。

目次 1 内房の話(十
項) 2 山水歡樂情景
(九項) 3 支那宿物語
り(四項) 4 尼寺風景
(五項) 5 支那風呂
(六項) 6 恍惚の阿片
境(十二項) 7 パイ
の煙(三項) 8 扇と蟲

室伏高信 著 價 四六判 二九〇頁
一圓卅錢 送料十二錢

謎の支那の全貌

支那
史の表裏
を説く！

エロとテロの交錯せる支那興亡五千年史、支
那にとつては篡奪・掠奪・殘虐性は日常の茶飯事
にて、その享樂性とを併せて知らざれば、支那を眞に
解す事は出来ぬ。本書は支那のサイクロペディアである

東京市芝公園七ノ十
振替東京一四七番

大東出版



◇ 淨 土 第三卷 第十二號 十二月號 目次 ◇

表紙……………中島松二
扉……………榮

論說 この時代と佛教……………佐藤賢順(二)

特輯・戦線に鳴響く信仰の鐘……………(二)

兵士とお坊さん(念佛部隊の話)……………大木三太郎(二)

陣頭の念佛回向(武人の鑑 鷹森部隊長)……………白簾靈光(四)

突撃説法(佐藤中尉 説法突撃)……………佐藤賢順(八)

隨筆 初冬 静宵……………吉田絃二郎(二)

私の感得した圓光大師……………福田闌正(九)
信仰相談……………中村辨康(五)

銃後の愛國の母……………豊島達夫(三)
の人力強い千人針……………代田重雄(三)



佛教常識

煩惱とは何か
成道會の話

隨信想仰

念佛爆彈

中野尅子 (六)

小懸說賞

洪水異聞 (中二畫)

梅澤義明 (四)

童話

雪夜の尼 (野子畫)

谷中安規 (三)

物語

多賀上人の出家 (鈴平畫)

古木鐵太郎 (元)

小讀說切

救ひのある人生 (中二畫)

吉田初太郎 (三)

歌壇

與謝野晶子選 (七)

俳壇

太田耳動子選 (三)

法語解説

戰陣に臨むとき 中村辨康 (三)

鑽仰運動ニユース

(六)

編輯室だより

(充)

◇浄

土 第十三卷 第十二號

十二月號 目次◇

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 送料共 三十三錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

読んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の被方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

淨土

十二月號

念佛には甚深の義と

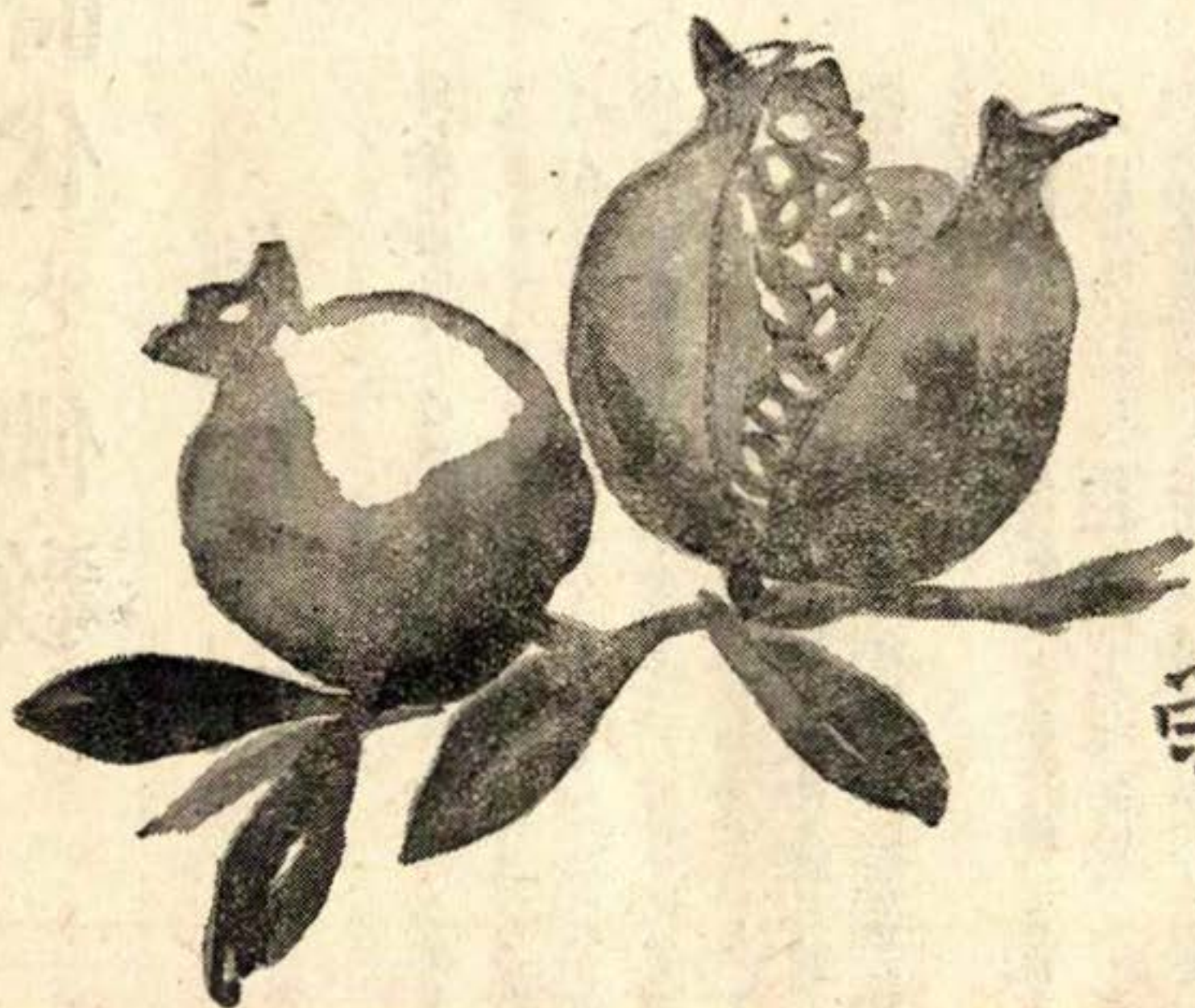
いふことなし

念佛申すものは

かならず往生すと

しるばかりなり

法語抄 六二



榮



この時代と佛教

佐 藤 賢 順

一

歴史は移る、とは歌ひ廢れた昔の小唄ではなくて、今では切々と吾々の足元に、身邊に、頭上に、迫ってくる現實である。歴史を客體的に眺めてはゐられなくなつた、吾々はそれを主體的に経験してゐるのだ、といふ逼迫した感じを、これ程にはつきり持つたことは、今の世代の人には會てなかつたことであらう。

會てヴァイーン條約は、歴史は移るといふこの必然を契約の力を以つて靜止の状態に置かうとしたが、十九世紀から歐洲大戰へかけての世界史は、結局この不自然な人為的阻止の破壊に終つた。國際聯盟は皮肉にも亦、それと同じ轍を踏んで、その必然を阻止しようとして企てたが、滔々たる奔流は自ら堰を切つて遮るものを

押し流し始めた。その「時代」のたゞ中に、吾々は今浮んでゐる。歴史のかくの如き必然を主體的に経験しなければならぬことは、人間の擔ふ宿命とも言へよう。フランス革命以來の自由主義的・個人主義的・資本主義的・民主主義的な思想や制度を擲出した明治、大正時代の霧圍氣の中に育てられてきた者にとつては、これは誠に大きくカーブを切つて轉換する時代と感ぜられるに相違ない。假りに今、この輝やかしい時代を「新國家形態の時代」とでも呼ぶことにしよう。

「新國家形態の時代」の性格をこゝに細微に涉つて分析することゝが目的ではないから、詳細は省略するが、後に述べることに關聯して必要と考へられる事項だけは擧げておかねばならない。十八世紀からつい最近に至るまでの社會觀、國家觀は、近世に於ける個人の自覺に基く個人主義を根柢としてゐる。それは知識の目

醒め、近代の科學的精神の獨立と雁行し、これと固く手を握り合つて進んできた。個人主義的國家觀は個人を尊重し個人を開放しその自由を認め、個人の自由なる競争を許し、個人の言論と權利とを尊重するから、そこに成立するものは自由競争の盛んな資本主義的な社會であり、民主主義的な國家である。社會は結局個人の利益と幸福を保證し増進するための約束に過ぎないこととなる。ルソーの社會契約説などはその理論を代表してゐる。然しその社會の中に生活する個人は、互に利益を挟んで對立し競争する。この契約的社會の同じ線の同質連續的な發展として、社會民主主義の社會、國家が現れ、更に又その連續として共產主義の國家形態が現れたのであるが、今は凡てそれに就いては割愛する。

ところでこゝに注意するに價する事實は、個人主義に基く國家觀が、個人主義と同じく十八世紀のフランスを温床とし、十九世紀のドイツに成育した近代の科學的精神と極めて親近な關係にあることである。近代の科學が残した功績は多々あるであらうが、凡てを普遍化し抽象化して沒價值的に（即ち人間の内面的な尊さから眼をそむけて）平均的に見る物の見方を教へた事は、功罪相半ばする顯著な業績である。解剖醫のメスにかゝつては宰相も浮浪人も、美女も醜婦も同じ一塊の「物」である筈であり、かく取扱ふことに科學の本來の使命がある。一言で言へば科學が近代に

殘した足跡は「偶像の破壊」である。近代の個人主義に基く國家が、個々の自由、權利を尊重するといふのは、一見するところこの科學的精神と矛盾して、個人の價値を尊重するが如く見えるけれども、決してさうではなく、それが認めるものは外面的な經濟的生活の自由や政治的發言の權利であつて、平均的に物を見る——即ちフランス革命以來の相言葉である平等、といふことに外ならず、人間の内面的な價値にまで觸れるものではない。

科學は普遍的、抽象化的、沒價值的であるから、當然に國際的である。科學に國境はないとは一種の標語とされたかの觀がある。かくの如き科學と固く手を握り合つた個人主義的國家形態の結論である共產主義が、國際主義を取つて、世界をブルジョアジーとプロレタリアートとの二つに分けて、この對立抗争を目標としたのも、人間の精神的な價値を撥無して唯物論を鐵則としたのも、いづれも當然と言へよう。さればこそ、これにあきたらずしてヒューマニズム運動が、フランス・コムニストの間につたのである。

然しかうした凡ての試みが少しも成功しなかつたばかりでなく、決して人間を幸福にしなかつたことを歴史が明かにした。單に普遍的、抽象化的、國際的な、知識のみの思辨が齎した國家觀が、具體的な歴史といふ舞臺の板には乗らない筋書であるこ

とを、吾々は現實に知つたのである。その細かな経緯を語ること
も亦、宗教雜誌の役目ではない。無規律な自由に對して、有機的
な統制を、自己の幸福を求める爲の便宜的な契約などを望むので
はなく、眞に相互の康安を願ふ温かき協和を、競争でなくて協同
個人主義的契約國家ではなくて全體主義的協同國家を——これが
新國家時代の願望である。それは國家といふものはとか社會とい
ふものはとかいふ抽象化された一般論であつてはならない。吾々
の國家は、現實のこの國家は、といふ特殊な具體論でなければ
ならない。「血と土の上に」——この民族を單位として、といふ欲
求は、ナチス・ドイツばかりではなく、廣く新時代の國家觀の基
礎をなすものでなければならぬ。

二

佛教は變轉極りない時世の上に、高く拔んで、歴史を超えた
不滅の炬火をかざして、時流の赴くべき方向を示してきた幾多の
經歷を持つてゐる。成程、歴史的な色々な事情で、或は逼塞し或
は破佛に遭遇し或は妥協しなどして、今にも正信が失はれ正法は
潰へるかと思はれ危懼せられたことは度々あつたであらう。然しそ
の度毎に立直つて、やがて又時代を照益したことは、佛教の歴史

が何よりも雄辯に語つてゐる。それは何によるのであらうか。佛
教の本質的なものは、歴史の上に現れはするが然し歴史を超えた
不滅のものであるからである。これに就いては本誌七月號に述べ
ておいた。

それはさて措き、當面の時代に處して佛教は如何なる役目を果
すべきであらうか。私はこれを佛教の此岸的意義と彼岸的意義と
に分けて、二つの力用からそれが果すべき役目を考へてみたいと
思ふ。

三

佛教は釋尊出世以來、二千五百年の時を歩んで印度から支那朝
鮮を傳承してきたが、日本に傳へられてからの佛教は、その發祥
地や傳承の地の佛教とは全く性格を異にしてゐる。日本佛教の特
性は、法(思想)や學派(研究團體)を中心として結成されたも
のではなく、具體的な人を中心として結成された所にある。その
「人」が時世を指導しようとする宗教的敏感から時機相應の(時
代と大衆の受け取り方に應ずる)教法を宣説し奉行する時に成
立した教團佛教、宗派佛教である點にある。宗派佛教は、法一
般を、即ち抽象的な佛教の本質一般を語り且つ行ずるのではな

くて、それぞれの時機に相應して、これを解説し直し、これを具體化するのである。普遍的・抽象的に佛教といふものを語るならば、それは國際的とも言へよう。然しさやうな佛教が日本では曾て一度も長續きした驗はない。日本民族は急速にこれを日本化して、時機相應の教としていつた。平安末期以後、淨土教が成立するやうになつてからは、この日本化は愈々顯著になつた。而もそれは特殊化され具體化されるだけに止るのではなくて、一定の宗教的天才を中心として、この人格を通して、普遍的なる佛教一般に觸れて行つた。來朝中であつた、ナチス・ドイツの代表的思想家エドゥアルト・シュブランガー教授が、歸國に際しての告別講演で日本文化を語りつゝたまたま佛教に言及して、「日本佛教は多くの宗派に分れてゐるが、それぞれ特殊の立場から普遍的なるものに觸れてゐる。日本民族は誠に不思議な民族である」と示唆する所多い言葉を漏らしてゐたが、それは吾々にとつては寧ろ當然のことと思へる。この特殊を通して普遍を見る、然し特殊は特殊であつて普遍にはならない、といふ論理を「浸透の辯證法」として説明した人があるが、かやうな説明をしなくとも、血と土と傳統の論理、行動の論理であると言へば事足りであらう。

四

さてかやうな日本佛教は、此岸的・現世的力用に於いては如何に働くであらうか。それは先づ歴史的に見て呪術的、祈禱的であつたことが多いし、現在も亦、段階的に見てさうであることが多い。それは主情的・意欲的に、人間以上の佛の力、法の力に依頼して、この現實の世に功德を齎らすやうに祈禱するか、或は罪障を懺悔して御利益に與らうとするかである。怨敵退散、敵國降服或は又、家内安全、商賈繁盛、病魔退散などの主情的な意味の教法として現れる。然しかやうな現世利益を求めることを主とする佛教は、主我的である故に、即ち個人を中心としてせいゝその周圍幾何かの範圍に現世の功德を掻き集めることが目的である故に、未だ少しも佛教の眞義に觸れてゐるものではない。主我的なる故に物質的たるを免れず、従つてこのやうな段階の佛教の行はれるところに對立抗爭の意識の薄らぐことはないであらう。日本が歴史上、國家的危機に露らされたことは、例へば元寇の襲來の如く、度々あつて、その度毎にかやうな呪術的な祈願がなされたのであつたが、然しこの段階の佛教は、現在の如き東洋平和の確立を目指し大亞細亞主義の經綸を有する大國家に相應しい教法では

ない筈である。これは更に次に述べる第二の段階の教法によつて
 披導せられて、初めて此岸的力用を現すのである。

五

「和國の教主」聖德太子が夙に十七條の憲法を制定せられ、第一條に「和を以て貴しと爲す」と宣ひ、第二條に「篤く三寶を敬へ」と宣はれたことは、茲に詳説の要なき周知の事柄であるが、和の思想は君臣一體、四生平等、四海兄弟の理想を示されたもので、内に主我的對立を拒けて和衷協同の社會、國家を實現し、萬民等しく康安の生活に與るべく、外は諸邦と提携して人類文化の發展に協力すべきを教へられたものである。而もこの「和」の理想を裏づける爲には「篤く三寶を敬ふ」ことがなければならぬとせられた。こゝに東夷日本は世界最高の精神文化を咀嚼することを得て、一躍にして世界日本となることが出來た。三寶とは佛と法と僧とであつて、同體の三寶、別體の三寶など種々の考へ方があるが、今は詳説する餘裕がないから、たゞ佛教に於ける本質的なもの、佛教の眞義とでも言ふにとめておかう。

和とは徒黨を組む相拮抗することではない。「人皆黨あり、亦達する者少し。是れを以て君父に順はず、乍ち隣里に違ふ」。和とは

「上和ぎ下睦ぶ」ことである（第一條）。征服者と被征服者との構成する國家や、個人の利益の爲に契約せられた國家や、階級對立の意識を強調させる國家に和の實現せられる筈はない。「國に二君なく、民に兩主なき」（第十二條）眞に君民一如、民族一體の國家に於いてこそ和は實現せらるべきである。民族の意識によつて固く結成せられた協同體國家の將來は、和の理念を一層徹底せしめることによつて更に強靱な紐帶を得るであらう。

然らば、和の理念は何によつて披導せらるべきか。それは既に述べた如く三寶の篤敬によつて、佛教の本義によつてである。聖德太子御自身の御言葉をもつて言へば「私に背きて公に向ふはこれ臣の道なり。凡そ人私あれば必ず恨あり。恨あれば必ず同せず、同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。中略」故に初章に云ふ上和ぎ下睦ぶとはそれ亦この謂なり（第十五條）といふ思想によつてである。かくて和の根柢には現代の相言葉である滅私奉公の信念が横はつてゐるのを知るであらう。

然しこの信念は、これを裏づけるものとして無我の思想、華嚴の緣起、般若の眞空、法華の妙有など一列の系統だつた思想を顧るとき一層合理的になるであらう。凡て在る所のものは因と縁とによつて生じてゐると見て、徹底的な相互依存の世界觀を樹立する緣起說や、從つて又、相互依存なる故に凡ての人間にも爾

餘の存在にも何等實體はなく、實體がない故に個人とか個物とかいふ個別性がないといふ人法二空の説や、人間も存在も凡て實體性、個別性がない、即ち空であるといふが、それは無、虛無といふやうな懷疑と絶望の深淵を開くのではなくして、却つて無一物なるが故に無盡藏であるといふ最も積極的な肯定と希望とに到達して、個別を排して全體を肯定するのであるといふ眞空妙有の説が、長い間、如何に和の觀念の基礎となつて我が民族を培ひ知らず識らずの間に、協同體國家の自覺を喚び醒まして來たかを思ひ起すべきである。諸宗それぞれ時機相應の角度から佛の覺を説いては來たがそれらの諸宗派が説く所を異にするにも拘らず等しく佛教である所以は、他の點に於いては兎に角、人間にも存在にもそのものゝ實體はない、といふ一言にして言へば無我的教法を解き明かしてきた共通の一點に懸つてゐる。この思想が日本民族を體の髓から育成してきたといふ現實の前には、如何なる反佛教的な辯疏も叩頭せざるを得ないであらう。かくて眞の意味の全體の信念が養はれ、民族全體の福祉と繁榮、國利民福を冀ふ場合に、眞の意味の全體主義が生きてくるのである。既に奈良朝以來、金光明經、仁王般若經、妙法蓮華經の三經が鎮護國家の經典とせられたのも單に主情的、主我的に現世の利益を祈願するが爲ではなく、思想的には寧ろ主智的、無我的なかやうな教法の段階を経て

來て後のことである。かくて佛教は護國の教と爲り得たのである。諸宗説くところ、蘭菊其の美を競ふと雖も、一度國家の問題に關すれば軌を一つにして護國の一點に終結することは、誠に日本佛教の特色である。傳教の「守護國界章」や榮西の「興禪護國論」や日蓮の「立正安國論」など明らかにこの問題を表面的に扱つたものに限らず、諸宗の祖師は何等かの形で必ずこの點に觸れてゐる。興禪護國といひ立信報國といつても、その基くところは佛教思想の本質たる全體主義の信念でなければならぬ。然しこの教法の第二の段階も、それだけで究極のものではない。それが此岸的な意義を充分に發揮する爲には、更に教法の第三の段階を豫想しそれに指導せられねばならない。(この教法の第二の段階は實はそれを又幾層かに分析して詳述しなければならぬが、今はその暇がない。)

六

教法の第三の段階に於いて、佛教は最も積極的に宗教としての眞の意義を發揮し、凡ての此岸的な力用に對して統一ある指標を與へる。佛教の彼岸的・來世的なはたらきがこれに他ならない。言ひ換へれば、それは生死の解脫に他ならない。生死を解脫して

現世の彼方に開かれる世界に輝やかしい希望が懸けられる時、地上の一切のものは、この彼岸の世界へと歸趨せしめられる。宗教の究極の問題は生死の解脱であらねばならぬ。こゝに思ひ當るならば、宗教と社會と、宗教と國家とを繞る種々の矛盾や疑問は解決せられる筈である。社會道德、國家倫理は結局は此岸的でありまたそこに意義を持つてゐる。宗教は終局に於いて彼岸的であらねばならず、そこに落ち着くまでは絶えざる歩みを續けるものである。

鎌倉時代以後、佛教の日本化が愈々徹底的に行はれてからは、生死の問題は最も明瞭に表面に現れてきた。それは禪、念佛、稱題など形式は異なるけれども、我が民族をして、最も端的に宗教の究極の問題を自覺せしめ、その解決に直參せしめたことは一つである。ところで、此岸に於いて此岸を見る立場、生にあつて生を受け取る生き方は、未だ眞に宗教的な生活とは言へない。此岸的立場にあつて、無我といひ眞空妙有といふことを、知識的に理解したとしても、それは未だ眞の全體主義を把握したとは言へない。端的に生死を超え出で、再び生へ歸り來る時こそ、生の眞面目が露になるのである。彼岸への願生を絶えず欣求する者、死を通して生を眺める者にとつては、生のみを知つて死を知らなかつた時に比べて、此岸は全く新なる光に照益されてゐると見える

であらう。生死を解脱した者にして初めて生の眞意義を把握することが出来るといふのは、逆説の如く聞えるが、決してさうではなくて、こゝにこそ佛教の眞の意義が存するのである。この教法の第三の段階を通して、高遠にして深遠なる佛教の理説の悉くは一つの「行」に具體化されて實踐される。而もその悉くが一つの行として實踐されるのは、如來の大悲を信受して、本願に隨順する生活に於いてであることは、吾々の復説し續説してきた所である。本願に信順する生活に於いてのみ、全體の立場は身を以つて實踐される。

これまで述べた所は、教法の三つの段階を順次に上昇する言はば往相の道を取つたのであるが、宗教の眞面目は、却つて率爾として第三の段階に直參し、そこから此岸に還りゆく言はば還相の途を選ぶところにあるのでなければならぬ。(了)

事變の折柄年末年始の御挨拶を
差控へさせて頂きます。

法然上人鑽仰會 眞野 正順

私 感 得 し た 圓 光 大 師

佛 子 福 田 闡 正

私が小さい時入寺した寺は寛通上人流の寺であつた、師僧の師匠即譽專修庵道上人は其姓の如く專修念佛三昧の人であつた。朝は三時に念佛申し乍ら床を離れ本堂本尊前に座し靜に念佛を稱え、五時になると鉦鼓を鳴らし念佛、五時は朝勤行大薫香一本の薫する間念佛、朝食の間も念佛人と話の間も念佛、小僧にお經を教える間も念佛、八時から十一時迄鉦鼓念佛、晝勤行後食事がすんで一時から五時迄鉦鼓念佛、五時夕勤行後食事がすんで七時から十時まで鉦鼓念佛、十時後きまつて床に入る横にやすまず座したまふ念佛し乍ら寝むる、これが老僧毎日の行事で、別時念佛を一週間やつたり或は四十八夜念佛したり或は佛名會三日間三千禮もかゝさなさいといふ念佛行者、時として三十分位御説教をするが唯念佛のありがたい話のみで餘事を交えない、かういふ老僧に育てられ常に念佛三昧の徳者の難有い型を見せられ思はず手を合せて拜んだことは度々であつた、今から思ふと此の即譽上人がほんとの淨土宗僧であつて他は淨土宗僧でないともで感じた、今の世にこんな念佛の行者は無い、光明會だとか辨榮上人だとか云つても即譽上人のやうな人には追ひつかぬ、辨榮上人が印度から歸られた時即譽上人の此の毎日行事に驚かれ口を極めて稱讃されたことを覚えてゐる、即譽上人は頭は圓光頭で法然上人そつくりだ、老後一ヶ月間食事を採らず本堂で念佛され、歩行もできなくなつたから我室に坐り乍ら念佛され、西化の三日前途に頭北面西に來迎佛奉安して初めて横臥され、念佛の口を去りしことなく珠數つまぐる指は間斷なし、孫弟子の我等二人を枕邊に呼び「念佛せよ」との二言ありし後遂に息は絶えたるが、つまぐる指の珠數をくること二十五回にして遂に止む、嬉しき喜ばしき往生なりき。

此の感化を受けてゐた私は法然上人七百五十年御遠忌の時、獨身なるを幸ひとし一切餘事を絶つて念佛三昧に精進すること一七日、全く無念無想に稱名し氣も狂はんばかりになつてゐたが、二十五日の正午ごろ眼は開きながら眸はじつと正確であり乍ら法然上人の御影がはつきりと表はれ給ひ、口元に笑を含みられ何か御説法の様子があり圓い／＼圓光が順々に擴大して限りなく廣がり十方法界に偏満さるゝかの如き氣持に満たされ何とも云へない嬉しさに充滿して念佛してゐることさえ覺えないで圓光裡に深く柔らかく包まれて眞に究竟界に到達したやうな心地であつた、眞にありがたい何物にも代え難い大圓光裡の味を味はして頂いた事を喜んだのであつた、この時直に思ふた彼の即譽上人は常にかくの如きありがたい柔糯な味を感じて大往生を遂げられたのかと悟つた時私もこれを徹して大往生を遂げたいと念願してゐる。



兵士とお坊さん

— 上海念佛部隊の話 —

大木三太郎

上海戦線の念佛軍

上海皇軍の第一戦に活躍しつゝある〇〇〇

部隊、——將兵悉く腕に珠數を巻いて、自ら稱して『念佛部隊』と云ふ。

軍隊と念佛、往昔は『南無阿彌陀佛』の旗

さし物をかざして戦場を馳驅した勇士もあつた。近代戦の華、我が皇軍部隊の中に『念佛軍』のあるのは敢て不思議ではあるまいが、これには次のやうな興味盡きざる一挿話がある。

秋酣の九月某日、わが出征部隊〇〇〇部隊〇〇〇名の宿舎は、常盤木の色濃い芝山内、淨上宗の古刹大本山増上寺であつた。

『なんだ、お寺か、あんまり縁起でもないな。引導を渡して貰ふのは未だ早いぞ。』

宿舎増上寺の山門を潜つた兵隊さん達の中には、斯う云ふつぶやきをする者が多かつた。

お寺は縁起が悪いと考へるのは當今の入達には無理も無い事で、現に、大阪、名古屋方面では坊さんの慰問や見送りはお断りすると云ふ極端な實例もあつた位で、増上寺に宿舎を定められた兵隊さん達もお寺の山門を見上げてこれと大同小異の印象を受けたに違ひなかつたらう。

が、大本山増上寺では自坊が將士の宿舎に決定するや、上は法主大増正大島徹水師より

下は學案に至るまで一山擧つて戰命の準備を備へてをつたところ、この兵隊さん達の嘆聲（？）が一山の僧侶の耳に入らぬ筈はない。これを聞いて先づ胸にピンと來たのが、本山布教師龍澤遵道師であつた。

これはこのまゝではいかぬと思つた師はその夜、將校の宿舎を訪れて、種々挨拶の後にかう云つたのである。

『今日當山にお出になつた兵隊さんの中でお寺に來て繼起でもない、と云ふやうな言葉を吐かれた方々があると聞いたが、これは聞捨てならぬことだと思ふ。勿論軍隊としては第一線に立つて直ぐ様活躍出来るだけの準備のあることは確信してゐるが、あゝ云ふことを言はれるやうでは未だ肝心の魂の準備が出來てをらぬことを物語つてゐるものだ。——私として、また當山として勇士の方々に是非御贈り申し度い言葉があるから、全部の方々にお堂にお集り願ひ度い。』

軍人と念佛

これには指揮官の方々始め一同大いに賛成されて、翌朝五時四十五分の點呼から六時三十分まで〇〇〇名の兵士が全部本堂に參堂して、佛教に就いての講話を聞くことになつた。

本山側はこの期こそ、佛教本來の面目を示して、一般の偏見を打破し、念佛の眞骨頂が、國民の精神が、延いては皇軍の攻撃精神に寄與するところの大なる事を示す絶好の機會であると云ふ譯で、全山を打つて一丸とする大活躍が始まつた。彌陀の大願仰力にお繼り申し、安心立命の境地に至らんか、この境地に於いては生死何者ぞ、敵彈何者ぞ、唯一死報國の精神あるのみ、眞個の大和魂はこの上に華を咲かせねばならぬと云ふ強い確信の下に、増上寺は勇士等に對する説教の教案を作製し、これによつて約二週間の滞在期間中五時四十五分より六時半までの毎朝四十五分間の行事を行ふことになつた。

さてその翌朝、點呼を済ませた勇士は全部本堂に集合した。それ迄に常念佛、晨朝會の

婦人達數十名が木魚を撞ち念佛を唱へて、莊嚴な雰囲気は堂一つばいに満ち溢れてゐた。その嚴肅の空氣を破つて、本山布教師、龍澤師の確信にみちた第一聲が、朗々と響き渡つて行つたのである。

婦人會の活躍

増上寺には以前から晨朝會と常念佛に參會する數十名の婦人信徒があつた。前にも述べたやうに、この増上寺婦人會の會員は本山が出征勇士の宿舎と決定するや、日頃念佛によつて鍊え上げた信仰の精神を銃後の守りに生ずるのはこの時とばかり、全會員擧げて、兵隊さん達の宿泊中の世話一切を自ら買つて出たのであつた。

炊事は云ふまでもなく、すゝぎ洗濯から宿舎の掃除、揺ゆい處に手のとゞく様な世話、凡ての費用を自分達で出し合つての勞力奉仕に他の目も涙ぐましい様な銃後婦人の活躍の繪巻が繰擧げられた。

「私達の兵隊さん、／＼／＼と彼等達は

まるで肉親の子、兄弟の様に兵隊さんのために働いて呉れたのです、と瀧澤師は記者に感激に溢れて語られたのであった。

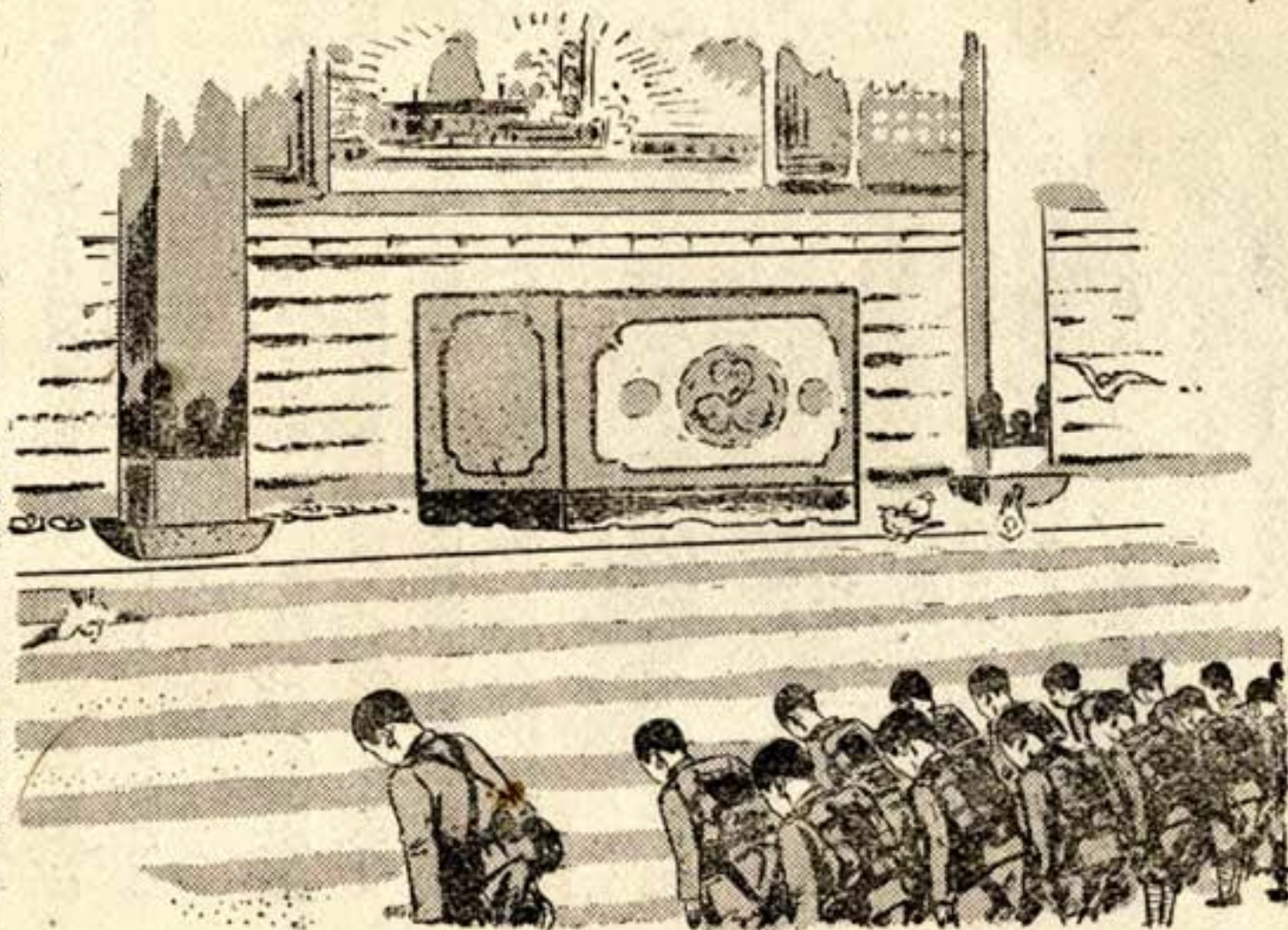
その婦人達が、朝になれば、兵隊さん達よりずつと早くから、本堂に参つて、木魚をたゝいて念佛を申してをる。點呼を終つた兵隊さんが、本堂に集る頃には、既に莊嚴な信仰の雰囲気、この甲斐々々しい婦人達にの念佛讀經の中から湧上つて堂に満ちてゐる。晝夜となく、自分達の世話を焼いてゐて呉れた婦人達が、早朝には、もう自分達よりもずつと早く、参堂してわき目も振らずに念佛してをる！ 兵隊さん達は、この婦人達の信仰の熱意に全くうたれたやうであつた。その影響は如何なる言葉よりも良く兵隊さん達に訴へたものがあつたに違ひなかつた。

お名號の眞の功德

この道俗一致、全山を擧げての慰問活動はその誠心が通ぜずにある筈はなかつた。次の

一例にもそのことが明きり露はれてゐる。

兵隊さん達は始めの中は、千人針の腹巻や



郷黨から贈られた日章旗などを、大島法主や幹部の人達の前へ持つて來て、

『一つ彈除けになるお經の文句を書いて下さい』などと云つて來て、本山の人達を弱らしてゐたが、それでも本山の人々は快く引受けて一々書いてやつてゐた。ところがに二日三日と日がたつに従つて、さう云ふ要求を持て來なくなつた。そして、千人針の腹巻に書いて頂き度いと云つて頼んで來るのは、『南無阿彌陀佛』のお名號に變つて行つた。

そしてその人達はしみじみと述懐するのでつた。

『全く私達の考へ方は間違つてゐた。自分では立派な覺悟は出來てゐる、立派にお國のために死ぬると思つてゐたが、皆さんのお世話になり、有難いお話を聞くにつれて、未だ未だ自分達の心境は未熟なものであり、信仰が足りなかつたと云ふことが解つて來た。瀧澤さんの云ふ通り、肝心の魂の準備が出來てをらないと云ふことが解つて來た。彈除の經文のみをあてにしてゐて何になる、それよりも私の凡てを委ねる六字のお名號の方が、どれだけ私を鼓舞し、戦場に於いて冷靜にして



大本山増上寺山門

充分な働きが出来ると云ふことが良く解つて来ました。』

そして『南無阿彌陀佛』の名號は兵隊さんの色々な持物の中に書き込まれて行つた。陣刀の束にまで書き込まれた。彈除けから南無阿彌陀佛へ、かくして勇士等の日本魂は眞の土壇の上に華を咲かして行つたのである。本山の教化活動は佛教の精神を實地に於て生かして行つたのである。

『念佛軍』 出征

さて、二週間に渡る本山と出征勇士との交戦は見事な成果ををさめたのであつた。

出征勇士達はもう『寺か、縁起でもないッ』とは云はなかつた。お寺に宿泊したことを寧ろ千載一遇の好機だつたと感じたに違ひなかつた。

遂に出征の日は來た。勇士達は内地に於ける最後の宿舎、思ひ出深い體驗を與へて呉れた大本山増上寺と別れる日、全員が本堂前に

整列した。乗馬も全部その中に加つてゐた。

大島法主は勇士達にお十念を授け、東京宗學院の生徒達が心を籠めて贈つた珠數を全員に授與したのであつた。

勇士達は本尊の阿彌陀佛に一齊に敬禮し、乗馬をもひざまづかせて、心からの感謝と敬意を表したのであつた。

感激の涙すら浮べてゐる勇士、僧侶、婦人達！ 嚴肅、莊嚴、この瞬間、信仰の炎は烈烈と燃え上つたのであつた！ こゝに會した者、何人もこの感激にみちた場面を永久に忘れることは出来ないであらう。

勇士達は六字の名號を肌身につけ、贈られた珠數を腕に巻いて彌陀の大願仰力に安心立命の境地を得て、勇氣百倍、自ら念佛軍と號して征途に就いたのであつた。

萬國に比類なき、わが皇軍將士の奮戦振りの中にあつて、この念佛軍は一きは目立つた勇戦を續けてゐる。その勇ましい後日譚もあるが、追つての機會に譲り、皇軍將士の多幸を祈つて筆を置く。(をはり)



陣頭の念佛供養

— 上海戦線の今様蓮生坊 —

本 誌 記 者

過ぐる八月二十四日敵前上陸直後名譽の
負傷をした我が鷹森部隊長は創口はすつか
り癒えてしまつたが未だに左頬に二つ砲弾
の破片を入れたまゝである。だがこの勇猛そ
のものゝやうな武人の胸の底には大慈悲心の
泉があつた。月明の夜澄み切つた大氣の中
に兵士達の安らかな寢息を立てゝゐる時でも一
人起きて端座「南無阿彌陀佛」と念佛を唱へ
てゐたのだ。(中略)これはつい先日壕の夜更
蠟燭の灯に照されつつ記者にしんみりと語つ
た部隊長の心境である。

—— 上陸以來随分澤山の犠牲者を出した。こ
の一人々々の犠牲こそ尊い皇軍の礎だ、

世界に冠たる國家を作り上げる礎だ、この
兵隊達は丁度自分の子と同じ年輩だ、この犠
牲者の親達の心情を察すると假に生き長ら
へて内地に凱旋するとしても、親達に顔を合
はす事は出来ない。夜更壕の中に横はつてゐ
ても一刻として安心して眠つたことはない。
一寸の間のまどろみにも見るものは敵前に
勇敢に仆れた將兵の顔だ、この仆れた將兵
達に勵まされては元氣になり一歩々と前進
する事が出来るのだ。(中略)

部隊長は法然上人の弟子となつたと言ふ
熊谷次郎直實、後の蓮生坊の心境について
語るのだ。(中略)

—— 剣は滅多に抜くものではない、鞘の中に
收めてゐるうちが尊いのだ。併し一旦剣を抜
いたら最後迄徹底的に剣の威力を發揮しな
ければならぬ。(中略)部隊長が命令を下
す時の氣持、これは言葉では説明出来ない、僕
は戦闘の合ひ間／＼に心に念佛を唱へてゐ
る、然し敵の彈雨の中を突撃して行く時には
念佛は出ない、戦闘の合ひ間／＼に念佛を唱
へて精神を統一する、然る後命令を下すのだ。
この時の命令には絶対に過りはないと確信し
てゐる——。いつの間にか蠟燭が燃え盡き
てゐた。(十月二十日東京朝日新聞所載〇〇
にて高橋特派員十九日發)

記者は東朝のこの記事に深く打たれる所があつた。今様蓮生部隊長の入信の動機について知りたいとあせりながら一兩日過ぎた二十二日の夜、淨土宗上海開教師として壯途につかれる中島政策氏の送別會に列席して、はからずも同席した 正大佛教學研究生の野々村弘宣氏に部隊長の信仰道程を聞く事が出来た。

鷹森部隊長は今から七年前の昭和六年岐

阜で四男松男君、三女久美子さんを一時に亡くし人生の道を覺めて敵いたのが、淨土宗の巨刹本誓寺の山門であつた。之が部隊長の眞實佛門に歸依した第一歩である。

本誓寺住職は野々村氏の師匠白旗靈光師で、爾來常に同師の門を訪れて信仰修道の徑に精通され、以て陣頭動ぜぬ念佛部隊長たる今日の風貌を培はれたのであつた。

(寫眞は鷹森部隊長)

武人の鑑鷹森部隊長を語る

白 簾 靈 光

今様蓮生坊

いま、上海の第一線に立つて砲煙彈雨の中で、一身を捧げられてゐる鷹森部隊長殿の名

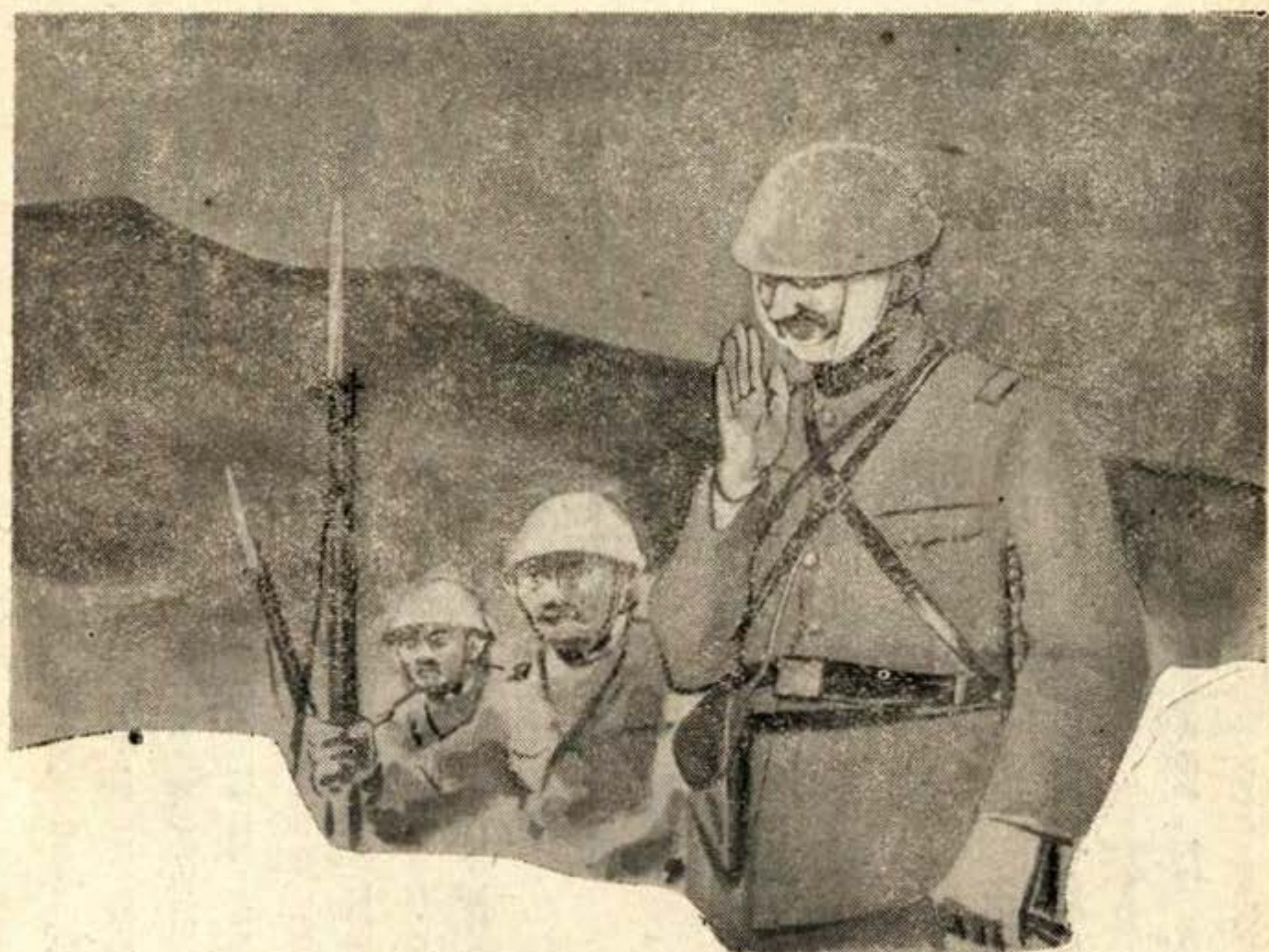
は、全國の皆様に新聞、ラヂオ等で充分御承知の事と存する。そしてその信念の強さ、軍人精神の汪溢、武人としては實に典型的な方であることも御存じの事と思ふ。

私は此の鷹森部隊長が淨土宗の信者であり、而かも單なる信者でなく僧侶にもまさる實に尊い念佛行者であることを御紹介申し上げ度い。

實の所、このことについて部隊長の御留守宅に伺つた所、けい子夫人は絶対にさう云ふ方面に發表してくれないと、口を極めての御遠慮であつたが、外の事でなくしてお念佛のこと故、廣く一般にその一端を御傳へして共に念佛の道を味ひ度いと存するのである。

坦々たる常道を歩んでゐる時にはなかくお説教を聴いても信仰の集りに來ても本物にはなりにくい。たゞ耳の中に入るだけ、頭の中で理解するだけ、義理で念佛を申し隨處で手を合はせるに過ぎないものだ。一度び苦しみのドン底につき落され、惱みの淵に沈む時に、はじめて、眞實の道を求める。

鷹森部隊長が本當に佛を求め、念佛を申される様になつたのも、深刻な原因によつて居た。勿論、それ以前にも淨土宗の信者として



の念佛は申して居られたが、昭和六年の冬のこと、僅かに一週間の間に、相次いで二人の愛児四男の松男君と三女の久美子さんを亡くされた。

入信の

動機

如何に平素信仰を得た吐の坐つた人でも、一人の子供ですら、況んや相次いで二人の愛児に別れたならば、平常の信仰も吐もガラガラツと跡型なく崩れてしまふ。部隊長が幼年學校から士官學校へ、長い軍隊生活の間に鍛え上げた鐵の様な不

動の信念も、此の人生の悲劇の前には一たまりもなかつた。こらへんとしてこらへ切れぬ苦しみに、心をえぐられるのであつた。この深刻な悩みに打ち勝たうとすればする程苦しみは増し、悲しみは募る。私は枕經に念佛しお葬式に念佛し、中陰に念佛し、その時毎に只念佛の有りがただけをお話して部隊長の心を慰めた。さすがは武人だけに面には表はされないが、それだけに却つて心中のもたえ、やるせなさ強かつた様である。

「悲しみに打ち勝つのではない、悩みを取り去つてしまふのではない、どうすることも出来ぬ此の悩みのまゝに、悲しみのまゝに如來に訴へ、如來に救ひを願うのです、苦しいまゝに南無阿彌陀佛と唱へ、やるせないまゝに南無阿彌陀佛と申す、我が兒は何處へ行つたのかともだえ尋ねるのではなくて、此の氣持をそのまゝ如來に捧げて捧げ切る念佛です、此の胸をしぼり、此の心のあるだけを投げ出して只南無阿彌陀佛と申す事、それだけです」。

此う云ふ意味の事をお話する中に、段々と念佛をせられ、聲高らかに木魚を打つて南無阿彌陀佛をせられる様になつた。淨土宗の勤行式も間もなく覚えられて私や弟子が讀經に自宅へ伺ふ時には必ず大きな聲で一緒に讀まれ、朝夕の勤行も爾來缺かすことなく續けられた。聯隊へ出勤の折と隊から歸宅の折とは又必ず新しい二本の位牌の前に額づいて念佛せられた。

かうして、部隊長は念佛の有りがたさをはつきりと悟られ、従つてあの二兒を憫ふ悲しみもそのまま念佛となつて悟の境地を拓かれて行つた。

當時、述懐して云はれるには、

「自分はこれまでシベリヤ、滿洲等に出て相當に危険な箇處にも出會はし、命を投げ出して掛つた事は度々あつた、が二人の子供を失つた時の氣持ほど痛切な事は嘗てなかつた」

と、まことにいつはらぬ軍人として眞實の氣持であります。

一家揃つて念佛信者

御留守宅は八十歳を越えられた部隊長の母堂と、夫人と數人の子供さんであるが、此の御家庭が又まことに明るい念佛家庭である。母堂は以前から念佛信者で、年を召してゐられるせいでもあらうが殆んど佛間に入りびたりで絶えず念佛を申しておられた。部隊長が念佛を申しおつとめの本を出して讀まれる様になると奥さんも子供さんも皆打ち揃つてお經の本を取り出し大きな聲でおつとめをせられる。寺から讀經に行くとき外で遊んでゐた子供衆が「坊さんが見えたッ」と云つて家の中へ走り込んで、すぐめい／＼にお經の本を持つて佛壇の前に坐つて、嬉しきうた顔でお經の始まるのを待ちこがれてゐる有様である。

此の部隊長にして此の家庭あり、此の家庭にして此の部隊長がある。私は此の時勢にっりこまれて、にはかに部隊長をかつぎ上げるのでは決してない。平素からこの熱心な念佛

者を心から尊敬し有りがたく思ひ、その念佛の家庭を自ら尊敬してゐたのである。

聯隊部隊長は今、第一線に身命を投げ打つて帝國の爲に戦つてゐられる。曩に、頸に重傷を受けつゝ、敢然幾多の軍機策略に一切を忘れて奉公の誠を致して居られるだらう。その不動の信念、不拔の氣魂は敢へて私らが推測すべくもありません。だが私は斷言する。陣中必ず念佛を忘れてゐられぬことを。あの二兒を亡くせられた斷腸の思ひは、今は幾多護國の人柱に對して冥福を祈る清らかな念佛となつて部隊長の口からほとばしつてゐる事であらふ。

念佛行者聯隊部隊長の奥ゆかしい幾多の語り草も、けい子夫人の謙虛な御志に對して語る事を差し控へよう。私どもはたゞ、心からなる念佛を以て皇軍の幾多尊い英靈を供養し、部隊長始め皇軍の武運長久を祈念するのみである。

佐藤賢順 突撃説法！

佐藤賢順

十月十九日の朝、快勝相次ぐ戦争のニュースと硝煙の匂ひでも漂ひさうな生々しい寫眞の滿載されてゐる新聞を開いて、次から次へと食するやうに読んでゐると、東京朝日新聞の社會面に、四段抜きの初號活字で「聲高」と遺言朗讀、村長、坊さん、支那浪人トリオ、數珠押揉み説法突撃」といふ不思議な見出しで、「〇〇にて横田特派員十八日發」の特電が掲載されてゐるのが眼に止まつた。ふと或る豫感に胸をときめかして、読んでゆくと——實は五六行位づゝ飛ばして讀み乍ら、急いで何かを捜すやうに眼で追ひかけてゐたのだが——あつた！ あつた！「やつたな」と私は思はず聲を出してしまつた。東北第一の名刹、福島桑折の無能寺の和尚、佐藤泰然中尉の武勳が傳へられてゐたからである。

坊さんと村長さんと支那浪人といふ毛色の變つた三人の將校が部隊の先頭に立つて、三日間の苦戦の後、遂に支那軍が金城湯地と恃む上海戦線の某重要地點を占領したといふ話で、その記事のあらまは、私の想像をも加へて書いてみると次の通りである。

この三人のうち坊さんといふのは佐藤泰然中尉、支那浪人といふのは山本保大尉でこの部隊の山口部隊長と同期の士官學校第二十期生で故あつて中途で軍を退いて、その半生を支那に過してゐたのが、この度の事變で應召出征したのださうである。山本大尉の父は日露戦役に矢張り大尉として出征して、名譽の戦死を遂げ、その母かね子刀自は、女ながら軍事功勞者として勳六等を頂いて居り、福岡縣内では「兵隊婆さん」で通つてゐる。

山本大尉の息も亦、現在士官學校にあるといふから、三代續いて武人の家柄である。もう一人の村長さんといふのは、福島縣東白川郡常豐村の豪農、近藤永昌氏で、青年村長として村内の信望を一身に集めてゐる徳望家ださうである。(山本氏のことや近藤氏のことには就いては、福島縣白河町常宣寺の足立俊雄氏——本會支部主任——が色々と詳細を知らせてくれた。佐藤中尉と足立氏とは昵懇の間柄である。)

この三人はいづれも隊長として兵を率ゐて敵と對峙した。上海某方面の敵は二十三師に學生隊を加へて強力な大部隊である上に、百足型の沼澤に細の目のやうにトーチカを繞らし、押せども突けども動かばこそ、二重三重の堅壘は如何とも抜くことが出来なかつた。我軍は遂に奇策を案じて、泥濘胸を没する塹壕から坑道を掘つて進んだ。三日目には漸く敵の間近かまで掘り進むことができた。

十月十七日、恰も神嘗祭の佳節であつた。この日、東京は蕭條と降り注ぐ秋の雨に暮れたが、江南の地は明月皎々と湧え渡つて、その下に燦し銀の如く光る塹壕や泥土の風景は、

突撃の命令を待つ將兵の胸に、種々の感懐を呼び醒したことであらう。

水のやうな月の光の流れる下では、戦禍も知らぬ虫の音が繁く聞えてゐた。愈々突撃だ。

佐藤中尉は軍服の内ポケットを上からしつかりと押へた。そこには、去る九月中旬勇躍征途に上るに當つて、今生の別れにとポケットの奥深く秘めてきた宮城縣往生寺の法然上人御自作の御木像の寫眞が入つてゐた。昨今彼が主となつて紹介の勞を取つた上人聖像である。中尉は又、軍服の外ポケットを押へてみて、豫て携へてきた一連の數珠を徐ろに取り出して、部下に向つて

「生死は凡て前世の宿縁だ！」

と短い言葉を投げつけた。「朝日」の記者はただこれだけの言葉をしか報じてゐないが、もつと何か言つたに違ひないと思ふ。人間が言葉で何事かを表現しようとする究極の瞬間だ。呼吸づまる静けさだ。これに續いてどういふ言葉が出たか知らない。生死の巖頭に立つた時に、人間の奥底から出る言葉を色々と想像してみるが、あれもこれもピッタリしない。何と言つたのであらうか。短い言葉を二

言三言鋭く投げつけたのに相違ない。自分から命を捨てゝの説法である。この説法に應じて、山本大尉も母たる「兵隊婆さん」から與へられた遺言狀を取り出して聲高らかに讀み上げた。部下の兵隊は聲を吞んで靜まり返つた。然し暫くして其の呼吸づまる緊張が解けてくると、兵達の間からは感極まつて吸り泣きの聲が聞えてきた。それも亦一しきりすると止んで、兵達は銃剣を抜いてつけ劍をした。愈々突撃の身構えだ。命令一下迫撃砲弾や手榴弾の雨の中を突撃又突撃、遂に東の空のほのぼのと白む頃には、さしもの敵の堅壘も總崩れとなつて、我軍は戦略の重要地點を占據することができた。

その勇猛果敢な突撃ぶりを、後方の觀測所で見たゐた一將校は、
「餘りの悲壯さに涙が出て、望遠鏡のレンズが曇つて、よく見えなかつた」と語つたさうである。

筆者は佐藤中尉とは學生時代机を並べてゐた。彼は福島中學を出て上京して矢吹博士のお宅から、大正大學の全身の宗教大學に通つてゐた。柔道と劍道で鍛えた部厚な四角な身

體で、よく休み時間には校庭で武勇談に花を咲かせる豪快な學生であつた。ロマンテイストの多かつたその頃の學生の中では、異彩のある存在だつた。成績もずばぬけて良かたつので、皆彼には一目置いてゐた。筆者が途中で轉學してから、お互によく行き來をしてゐた。

「朝日」の記事を家の者に見せてやると、「あの人なら屹度暴れ廻るでせう」と噂しあつた。筆者は宗教的信念のある人間の、事に望んでの幸福を思つた。

然し最近の彼からの通知によると、この戦闘でかそれに續いての戦闘でか、十八日とあるから同日であるが、武運拙く腰部に貫通銃創を受けて、野戦病院に收容されてゐるさうである。彼の無念さぞかしと想像する。

散々持つて廻つたこの新聞の切り抜きを、上海開教副使として中島政義君が出發する時に、同窓幾名かの寄せ書きの手紙に同封して託したところが、中島君は佐藤中尉を見舞つて、手渡してくれたと便りがあつた。その切り抜きを讀んで、彼のことだから、又豪快に笑つてゐるに相違ない。



初冬静宵

吉田絃二郎

今朝は富士も眞白な雪につゝまれてしまつた。大山から丹澤、秩父あたりの嶺もはろはろと雪をいたゞいてゐる。武蔵野の中に立つて初雪につゝまれた遠い山を眺むる時しみじみと生きてゐることのありがたさと寂しさとを感じる。

武蔵野の耕作地はすでに冬ごもりの支度にとりかゝつてゐる。陸稻は收穫を了へ、畑の周囲には黍の殻が一纏めにして建てかけられてゐたり、霜に冰てた蔬菜が道傍に堆く棄てられてゐたりする。

黒い土の中に眞白な鵲鴝が蟲をさがしつゝ寒々とした聲で鳴いてゐる。

つひこなひだまで蕎麥の花を見た畑の隅には忘れられ

たやうにしてたゞ一叢の寒菊がとりのこされてゐる。

耕すともなく、打ち棄てられた畑の黒い土をじつと見つめてゐるばかりにも初冬の虚ろな感じはわいて来る。

ゆるやかな耕作地を捲うて草紅葉が燃えはじめた。なだらかな丘の裾を縫つて流れがあり、流れを越えて、さになだらかな丘があり、丘はさらに丘より丘へと無限につゞく。丘の片隅には櫟や檜の林があり、林のかなたには秩父や、大山や箱根の山々が蒼然として走つてゐる。

秋が来るごとに、冬が来るごとに、わたくしはほとんど毎日武蔵野の耕作地を横切り、雑木林の中を歩いてゐた。そして龍膽や、鳥兜や、オケラや、ほとゝぎす草や、烏瓜や、のしめらんの話を妻に語つて聞かせた。澤

のほとりに立つて初雪の山を眺めては家に歸つて山の雪の話を探りかへした。

わたくしは今日も山の初雪を見、霜枯れたる小菊を見出した。そして雑木林の小徑を歩いて家に歸つて行つた。しかし家にはすでに語るべき誰もゐない。落葉を踏むごとに静かな冬のわびしさが胸に迫つて來た。

わたくしは明日死ぬかも知れぬ。或ひは二年三年、十年の後までも生き伸びなければならぬかも知れぬ。一切は天に在る。わたくしは死ぬることを寂しいとは思へ、恐ろしいとは思はない。死によりてのみまことの涅槃は得られるであらうことを信じてゐる。

わたくしは今年も武蔵野の秋に生き、冬を迎へることができた。ありがたいことだと思ふ。

庭の隅の茶の花、山茶花、小菊にも生きてあること、うれしさとわびしさを感じる。

朝ごとに山茶花を折り、小菊を折りて佛前に供へることにたゞ一人生きてあることについていろいろのことを思ふ。すでに約半年の間わたくしは夜となく雪となく、

生死の一大事について静思し、静観しつゝけて來た。冷たい鐵の扉の前に枯坐して、扉の奥に永劫なるものを掴まうとしてゐる。二年、三年、十年、わたくしはこの一大事のために凝念するであらうとも何の光明をも恵まれないかも知れない。しかしわたくしは失望しない。わたくしは光明を欲しない。わたくしは悲しみのさらに深くさらに切ならんことを祈る。

x

朝毎に櫟の落葉が庭を埋めてしまふほどに積もる。いつもは朝毎に掃き清めてゐたが、今年はそのまゝに捨て置くので、恰かも庭中が雑木山のやうに落葉に埋まつてゐる。竹林の中もそのまゝに放つて置いたので竹林の中も笹の葉が堆く積もつてゐる。

夏の間は露の落ちて笹の葉を打つ音を靜かな竹林に聴いたものであるが、このころは庭に下りる小鳥の笹の葉や櫟の落葉をかきこそと掻く音を聴くやうになつた。

武蔵野の木立につゝまれた庭では、風も吹かぬ靜かな

日がつゞく。香爐の火を取りかへたり、花の水を替へたりするたんびにわたくしは佛間から廊下を渡つて臺所の方へ通ふ。そのたんびに立ちどまつては庭の落葉を眺め葉がくれに鳴いてゐる小鳥の聲を聴く。鶴、青鸚、かしらだか、このはかへし、繡眼兒、鶉などといろいろな小鳥が来る。

竹林の中の石も六七年の間にすつかり苔深くなつて、わづかにとりのこされた錦木の紅い葉が石の上におしかぶさつてゐる。

竹の下のかすかな薄暗がりを自分獨りの世界として、いつも何か思惟凝念してゐるやうな石を見てゐると、寂しくもあるが、尊くもある。わたくしもこれから竹林の石のやうに、うれしいことも、悲しいことも、一切をじつとわが胸に抱いて生くる限り靜かに生きて行かう。

唇が開かるゝ刹那、魂は眠る。言葉に出さるゝ刹那、眞理は眠る。生きてゐる間わたくしたちの愛は限られてゐる。沈黙によりて、魂は生き、死によりてはじめて愛は無限に生きる。かういつた感じがおぼろげながら、實

感としてわたくしの裡に生まれて來たやうな氣がする。

天涯孤獨の身には家を持ち、狭い庭を持つてゐることすらが耐へがたい苦痛となつてしまつた。生きることさへもが苦しい。晝も夜も生と死の間に彷徨してゐる。しかしわたくしは時として、かつて在りしよりは一層深く生きることのありがたさを感じることもある。人間の悲しみのかくばかり深きものであり、かくばかり切なるものであることを知つたのも、永遠なる存在の慈悲であらう。わたくしは悲しみに徹する生存のいかに苦痛であるかを知ると同時に、いかに尊きかを知る。

日が暮れかゝつて來た。わたくしは庭に立つては落葉を踏みながら佛間の燈を見つめてゐる。宵毎に庭に立つて佛間の燈を眺めてゐる自分自身をいたはしく思ふ。肩に手を觸れて見ると霜でも降りたのか石のやうに冷たい。

銃後の人々



愛國の母

豊島達夫

「皆さん、お忙がしいところを、有難うございました。件はお蔭さまで無事に入隊するこ
とが出来ました」

本所區厩橋四の一五、綿商の鎗木倉蔵（五
七）は、家に歸りつくと、一緒に歡送してくれ
た、在郷軍人、町會、青年團の人々に、吻
つとしたやうに挨拶した。

「これといふのも、皆さんの親切とお骨折
りの結果です。——お口に合ふものはありま
せんが、酒を用意してありますから、どうぞ

上つてください」

「さあ、皆さん、ご遠慮なく、——ホンのお
口汚しですけれども……」

妻女のきく（五四）も、口を添へた。

「鎗木さん、お目出たらう。ではお言葉に甘へ
て、ご馳走になります」

「徳三郎君の奮闘を、祈らせてもらひます」
在郷軍人や町會の人々は、さう言ふと店
頭に腰かけて、各自盃をとり上げた。

去る七月七日夜半、暴戾なる支那側の蘆溝
橋に於ける一發から、突如惹き起された日支
事變は、日と共に戦線ますます擴大、ために

街頭 力強い千人針

代田重雄

××町では一番人通りのはげしい驛の前の
大通り。

その右側のタバコ屋の角に立つた尋常四
年生位の女の子は、女の人の姿を見つけ
ると、人混みをかき分けて行つて「千人針を
お願ひします」と叮嚀に頭を下げて、一針づ
つ縫つて貰ふのでした。そして、その度に、
ホツとしたやうに、一つ／＼増えてゆく千人
針をなつかしさうにヂツと見つめてゐるので
した。

たまには面倒臭いと言ひたいやうな女の
人もありました。少女は一生懸命です。一
針でもよけいに縫つて貰ふ事より他、何の考
へも無ささうでした。

私は恰度その町のデパートに、今度の事
變で鹵獲した支那軍の兵器が陳列されたので
それを見に来て、圖らずもこの熱心な女の子
の千人針の姿を見て、全く心を打たれてし

支那軍情に一意馬をすすめる皇軍に参加すべく、街の勇士が續々と應召してゐる十月〇日、倉藏の一粒種徳三郎も、やはり精銳の一人として召集され、今日無事に〇隊に入隊することが出来たのである。

「鎬木さん、徳三郎さんは、屹度立派な武勳を擧げて凱旋しますよ」

酒がすすんだ時、町會の役員の一人が言つた。

「さうならいいんですけど、何しろ一人息子で、我儘に育てて了ひましたから、立派に御國にご奉公が出来ればいいと、そればかりが心配ですよ」

「いやそんな事ありません。徳三郎君は普段は温しいけれど、いざとなると、却々利かないところがあるし、はゝゝ」

「はゝゝ、利かない處は、阿母ゆづりですてねゝゝ」

と、顔を見合せて笑つた時、倉藏は、どうしたのか、突然、頭を抱へて、フラ／＼と横倒しに倒れた。

「あつ、鎬木さん、どうしたんです？」

「……」

「鎬木さん、氣持でも悪いんですか！」

が、横に倒れた倉藏は、そのまゝ返事もなく、睜つた目を室に据ゑ、顔いろも變つて、「う、う、うゝゝゝ」と、唸めきを洩らすばかりだ。

「あなた、あなた——」奥にゐた妻のきくが飛んできて、抱へ起した。唇が吊つて、よだれを流してゐる。

「済みません、誰方が醫者を呼んできて頂けませんか」

「よし、僕が行つてくる——」

在郷軍人の一人が、眞つ先に駆け出して行つた。あとの人々も、もう酒どころではない皆立上つて、意外な出来事に、狼狽しながらも、倉藏の床を敷いたり、背をさすつたり、元氣をつけたりした。

しかし倉藏は、すでに四肢の自由を奪はれ意識も半ば失つて、唯苦しげな唸めきをもたらすばかり。

やがて醫者がきた。診察の結果は、腦溢血だつた。

そして、きくを始めそれらの人の徹宵の看護も甲斐なく、翌日、呼吸を引とつてしまつ

まつて、何も彼も忘れて暫く其處に立止つて眺めてゐたのでした。

その翌晩も私はある用事で、その驛の前の大通りに行くと、少女は昨夜と同じやうに夜目にも白い千人針の布を持つて、傍目もふらず女の人の姿を見つけると、飛び立つやう



に傍へ飛んで行つて、纏つて貰つてゐました。冷んやりとした風の吹く晩です。

昨晩も、今夜も、何んとか感心な少女だらうと私は思つて、ソツと傍へ近付いて「誰か兵隊さんに出るの？」と尋ねると、少女は案外恥らふ様子もなく「お父うさんが出るのです」

たのである。

二

「奥さん、何ともお悔みの申しやうがありません。——お氣の毒に存じます」

徳三郎の出征といふ、この上もない一家の名譽と喜びから、倉藏のあまりにも唐突な死の悲しみの底に一氣に墮落された、妻きく的心情を察して、誰も顔を上げるものがなかった。

「はい、有難う存じます」

しかし、きくは、氣丈にも涙一つ見せず、

「かうなりましたのも、因縁でございませう。——私はとうから覺悟して居りました」

手傳ひにきてゐる、町會の役員、在郷軍人達も、その立派な心根に感動しながら、

「ところで奥さん、徳三郎君に知らせなければなりません、私達が行つてようございませうか。——入隊したと言つても、まだ出征したと云ふわけではなし、それに他の事と違ふから、外出の許可をきつと貰へるにちがひありません」

と言つた。だが、きくは即座に頭をふつて、

「いいえ、徳三郎には、知らせない事に致しました」

「えゝ、知らせない？——それは又何故です？」

人々は愕いて訊き返した。

「はい、徳三郎は、もう國家に差上げた體です、父親の死を知らせて、折角の覺悟が鈍るやうなことがあつては、それこそ 陛下に對して申譯ございせんから——」

「成るほど——」

町會や在郷軍人の人々は、直ぐにはあとの言葉が出なかつた。——年老いた女として、何といふ崇高な至念であらう。

陛下のため國家のため、日本臣民として、身の犠牲を厭ふ者はないが、しかし、かかる悲歎のさ中に於て、公私の別を截然と處理することは、容易なわざではない。それだけに、きくの毅然たるかうした態度のうらには、袂を咄んで涙こらへる、斷腸の思ひ、いかに切々たるものがあらう。

誰も彼も、きくの愛國の熱情に心うたれて、涙をのんだ。が、卒然として、その中の一人は、顔を上げると、みんなを物蔭に

と、はつきり答へました。「一人で大變だね」と言ふと、「えゝ、お母あさんが病氣で休んでゐますから、でも、もう少しで出來上るのです」と言つて、少女は、何故か俯向いてしまひました。よけいな事を尋ねて返つて悪い事をしたと思ひ、私は濟まない氣持で、少女の傍を離れてしまひました。

少女の姿から察して、恵まれた家庭の子供で無い事は知れます。しかし、何んと感心な心掛けの少女でありませう。父の爲を思ひ、母に代つて、ひたむきに千人針の努力をつづけてゐる健氣な少女、私の心には、この少女のいちらしい父を思ふひたむきな純情が、實に美しい、尊いものゝやうに映りました。少し行つてから振り向くと、少女はもう一心に、次ぎの女の人を見つけてゐました。「どうぞあの女の子の千人針が、早く出來ますやうに」私は思はず心にかうつぶやきました。

それから三日過ぎたある朝、その町の驛の前の大通りを「萬歳々々」と歡呼の聲に送られながら行進する出征兵士の一組に、私は出會ひました。それはいつもとは違つて歡送

呼んで言つた。
「奥さんは、おれ達の手前、ことさらあんな強がり言つてゐるんだ。腹のなかでは、泣いて、徳三郎君に死顔を見せたいと思つてゐるにちがひないんだ。」

出の許可をもらつてやらう」
かくて三四人の者が、圓タクに乗つて、徳三郎の入隊してゐる、〇隊に急行した。

三

——案の定、倉蔵の死を知つた〇隊長は徳三郎を呼んで外出の許可を與へた。
「鑄木、特別だぞ。早く行つて、思ふ存分父親と別を告げてこい」
「はつ——」
徳三郎は、夢を見る思ひであつた。あれほど元氣で自、分を歡送してくれた父が、すでにこの世の人でないとは、容易に信じられなかつた。



「うむ、さうだ、そして隊長に願つて、外けれども、それは事實だと言ふ、蔽ふことの出来ぬ現實だといふ。——徳三郎は、一刻

者の少い、淋しい一團でした。だが、誰も一生懸命に歡呼の聲をあげてゐます。私は思はず立止つてそれを眺めますと、四十を幾つか越えてゐるらしい出征兵のすぐうしろに、弟であらう小さな男の子を背負つて、手に日章旗を持ち同じやうに「萬歳々々」と、あの限りの聲で叫んでゐる少女を見ました。お、それは、いつかの晩の感心な千人針の少女ではありませんか。今日こそ、お父さんの勇ましく出征する日だったのです。
少女の一生懸命に叫ぶ萬歳の聲、それはお父うさんをどんなに元氣づけた事でせう。それはお父うさんには、どんなに嬉しい萬歳の聲であつたでせう。
あの晩少女は私に「お母あさんは病氣で休んでゐる」と言ひました。おそらくお母あさんは病床からこの勇ましい出發を見送つた事でせう。私はそれを思ふと目頭が熱くなつて來ました。
それをヂツと見送つてゐるうちに、私はフトそれが當然自分のつとめであるかのやうにこの一組に加はつて「萬歳々々」と精いっぱい、歡呼の聲を送りました。私は心から聲

も早く、父親の亡骸に抱きついて、その死を心からいたみたかつた。さめくと泣いて見たかつた。

かれは、宙をとぶやうにして、我が家の入口に立つた。

「お母アさん、ただ今戻りました」

黒い幔幕が張りめぐらされ、各方面から贈られた花環にかざられた店頭で、さう叫んで、一步内部に足を入れようとした時、

「あつ、お前は、徳三郎——」

右往左往する人々の間から、早くもその軍服姿をみつめて、駆け出してきたのは、母のきくだった。そして、

「入つてはいけない、何故お前は、おめくと歸つてきましたか？」

と、いきなり言つた。

「え？ お母アさん、何を言ふんです。僕は立派に外出の許可をもらつて、歸つてきたんですよ」

徳三郎が、怪訝さうにいふのに、

「何を言ふのです。お前は御國に捧げた體ではないか。もう私の子ではない、お父さんの子でもない、陛下の赤子です。その大切な體

でありながら、こんな事位に、泣いたり、慌てたり、何といふことですか！」

「……」

「お歸りなさい、早く隊にお歸りなさい。御國の爲に戦つて、白骨となつて立派に凱旋するまでは、一步も家に入れることは出来ません」

流石に、烈しい語調で言ひながらもきくの

目には、キラリと露の様な泪がひかつてゐた

——並居る人々も、新たな感動に噎んで、

あちこちから嗚咽の聲が洩れた。

噫、この母の至情、祖國愛に燃える熱血の

前には、徳三郎も返す言葉がなく、僅かに町

會や在郷軍人の人々のとりなしで、母の許を

うけ、一分だけの焼香を父の靈前に済ませる

と潔く歸隊し、折返し直ぐに、

「御國のために立派に戦つて、靖國神社に凱旋します」

と、手紙を出したのであつた。

一方〇〇隊長は、この母親の見上げた心

に感激し、大島少尉に命じて、同日午後七時

鐘木方を訪問、〇〇隊を代表して、倉藏の靈

を弔つたのである。

援し、力づけてやりたかつたのです。お父うさんに、感心な少女に——。おそらく見送人の誰もが、この少女の心に打たれたに違ひありません。電車が來ました。そしてお父うさんはホームに立つてゐる多くの見送人に最後の敬禮をしました。

「×××君、萬歳」「萬歳」「萬歳」少女も右手に持った旗が破けるくらゐ、一生懸命に強く、打ち振つて、父の姿が見えなくなるまで、元氣に、涙一つこぼさず「萬歳々々」

と叫びつゞけました。私も叫びました。少女

は私の姿を発見すると、満足さうにニッコ

リと笑つてお叩頭をしました。それは、何か

の感謝でもあるかのやうに思はれ、私も心

で御苦勞さまと言つて、少女に微笑んで挨拶

をしました。

そして私は、少女のお父うさんがどうぞ一

日も早く無事に凱旋して歸つて來ますやうに

と吾が事の様に、心の中にかう念じました。

少女もきつとさう思つてゐた事でせう。

少女が一生懸命にこさへた千人針の腹巻、

その力強い千人針は必ず、お父うさんを無

事に凱旋させずには置かないでせう。

多度の五位の出家

古 木 鐵 太 郎



昔、讃岐國多度の郡に、源大夫といふ者がありました。心が猛々しく、殺生を業としてをりました。何時も朝から晩まで野山に狩りに出では鹿や鳥を捕へたり、河や海に行つては魚を捕つてをりました。また人の首を切つたり手足を折らぬ日は殆んどありませんでした。ものゝ因果を知らないで、三寶を信じません。まして法師といふ者をば特別嫌つて近くにも寄せつけませんでした。こんな風で、甚だ悪人でしたから、その國の人々も皆恐れてをりました。

ある時、この人が家來を四五人引きつれて、鹿などを澤山捕へて山から歸つて來ますと、途中に堂があつて、人が多勢集つてゐますから、

「此處は何をする所か？」

と訊きますと、家來が、

「これは堂です。いま、講を行つてゐるのでせう。講を行ふといふのは、佛教を供養することです、とても貴いことなのです」

と云ひますと、五位は、

「そんなことをする者があるとは、うすく聞いてはゐたが、こんなに傍

で見たことはなかつた。一體どんなことを言ふものか、一寸聴いて来るから、少時待つてをれ」

と云つて、馬から下りました。そこで家來共もみんな下りて、こいつはどんなことになるか分らない、講師に無禮をかけて攫みかゝりでもされたら困つたものだと思つてをりますと、五位はただ歩いて行つて堂に入りましたので、その講の場所に居合せた者共も、こんな悪人が入つて來たのですから、どんなことを仕でかすか分らないと思つて、怖はがつてゐました。中には怖はがつて出て行つた者もありました。五位は其所に竝んでゐる人々を押分けて入りますと、丁度草が風に靡く様に靡く中を通つて行つて、高坐に座つて、講師を眞圖面に見据ゑながら、

「講師は何を言つてゐたのか？ 俺が成る程と思ふ様なことを言つて聴かせろ。でなければ、不都合だぞ！」と云つて、差してゐる刀を手で押し廻してゐました。

講師は悪いことに出會つたと、恐ろしくて喋舌つてゐたことも忘れて、引きずり落とされはしまいかと思ひましたが、智慧のある人でしたから、佛助け給へと念じて、

「こゝから西の方へ向つて遠く行くと佛様がおいでになります。阿彌陀佛と申上げます。その佛様は心が廣くて、長い間罪を造り重ねた者でも、心を改めて一度阿彌陀佛と申したならば、きつと

その者を迎へて楽しい國に、何でも思ふことの叶ふ身と生れて、終には佛様となります」

と答へました。五位はこれを聴いて、

「その佛様は人を憐れまれて、この俺でも憎みはなさらないかな？」

「左様です」

「そんなら俺がその佛様の名をお呼びすれば、答へて下さるかな？」

「それも心をこめてお呼びになれば、決してお答へにならないことはありません」

「その佛様はどんな人間を、いゝとおつしやるのか？」

「人が他人よりは自分の子供が可愛いと思ふ様に、佛様も誰といつてお憎みはなさらないが、御弟子になつた者をば、いくらか多くお思ひになませう」

「どういふのが弟子と云ふのか？」

「今日の講師の様に頭を剃つた者は、皆佛様の御弟子です。男も女も御弟子ですけれど、頭を剃れば尙更左うなのです」

「そんなら俺のこの頭を剃つてくれ」

「それは御感心なことではありますけれど、いま急に どうしてその御頭をばお剃りになりますか？ 本當にお考へになることが

あるのなら、家に歸つて妻子や家族達に相談して、萬事を整へてからお剃りなさい」

「貴様は佛様の御弟子と名乗つて、佛様は嘘はおつしやらない、御弟子になつた者をば憐れみなさると言つておきながら、どうして直ぐに舌を返して、後に剃れなぞと言ふのか。それは解らんぞ！」

と五位は云つて、刀を抜いて、自分で髪を根際から切つてしまひました。

こんな悪人が俄かに髪を切つたのですから、どんなことが始まるだらうと、講師もあわてゝ物も云はず、其所に居た者共も互ひに噪いでゐました。また家來共もこれを聞いて、

「わが君は何をなさるのだらう」

と云つて、大刀を抜いたり箭を番へたりして駈け入つて來ました。主はこれを見て大聲で家來共を静めながら、

「お前等は俺がいゝ身にならうとするのを、なんで邪魔しようとするのか。今朝まではお前等有る上にも、まだ家來が足りないと思つてゐたけれど、これから後はさつさとめいめいの行きたい所へ行つて、仕はれたいと思ふ人に仕はれて、一人も俺にはついてはならない」

と云ひました。すると家來共は、

「どうしてそんなことをば俄かになさるのです。本氣とも思はれません。きつと託きものでもしてゐるのかも知れない」

と云つて、みんな轉がらんばかりにして悲しみました。主はこれを止めて、髪を切つて佛様に奉り、すぐに湯をわかつて、水干の紐を解いて押しのけて、自分で頭を洗つて、講師に向ひ、

「こら、俺の頭を剃れ。剃らねば承知しないぞ！」

と云ひますと、本當にこんなにまで思ひこんでゐるものを、剃つてやらないのもいけない。また出家を邪魔しても罪なことだとかたゝ／＼怖はくもあるので、講師は高座から下りて、頭を剃つてやつて戒を授けました。それを見た家來共は涙を流してひどく悲しがりました。

それから入道は着てゐた水干や袴に布衣袈裟など着替へ、持つてゐた弓や胡録などに金鼓を持ち替へ、衣袈裟を正しく着て、金鼓を首に懸けながら、

「俺はこれから西の方に行つて、阿彌陀佛を呼び奉つて、鉦鼓を叩いて答へなさる所まで行かうと思ふ。答へなさらない限りは野山であれ海河であれ、ちつとだつて引返すまい。たゞ／＼向つてゆく方へ行かねばならない」

と云つて、大聲を張り擧げて、

「阿彌陀佛や、おい／＼」

と叩きながら行きますので、家來共も一緒に従つて行かうとしますと、

「お前等は俺の行く道を邪魔するつもりだらう」

と云つて、打たうとしますので、やつと留まりました。

かうして西に向つて阿彌陀佛を呼び奉

つて叩きながら行きますと、實際云つ

た様に、深い水だからといつて浅い

所を選ぶでなし、高い峯だからとい

つて廻り道をするでなし、蹲いたり

轉かつたりしながらどんく行きま

すと、日が暮れて或る寺に辿りつき

ました。そしてその寺の住持に向つ

て、

「わしは發心して、西に向つて行くのだ

が、山だらうが平地だらうが構はず、後など

振返らず、これから西に高い峯を越えて行かうと

思ふのだが、七日経つたらわしの居る所をきつと尋ねて來ておく

れ。道しるべに草を結びながら行くから、それを頼りにして來て

おくれ。——ところで、何か食べる物があつたら、ちよつぱり下



され」と云ひましたので、干飯を出して來てやりましたところが、
「これは多過ぎるは」

と云つて、ほんの少しばかり紙に包んで腰に挟んで、その堂を

出て行きました。住持は、

「もう夜だから、一晚泊つて行きなされ」

と云つて留めましたが、聞入れないで行つ

てしまひました。

その後住持は彼が云つた様に、七日目

になつて尋ねて行きますと、本當に草

が結んであります。それを頼りに高い

峯を越えて見ますと、またそれよりも

高くて峻しい峯があつて、その峯に登

つて見ますと、西の方に海の見える所

がありました。そこに二股になつた木が

あつて、その股に入道が登つてゐて、鉦鼓

を叩きながら、

「阿彌陀佛や、おいく」

と叫んでをりました。住持を見ると喜んで、

「わしはもつとこれから西に行つて、海に入らうと思つたけれ

ど、こゝで阿彌陀佛がお答へなされたので、それを呼び奉つて

ゐたところだ」

と云ひました。住持はそれを聴いて不思議なことだと思つて、

「何とお答へなされたか？」

と訊きますと、

「それではお呼び奉るから聴きなされ」

と云つて、

「阿彌陀佛よや、おい／＼何處におはします」

と叫びますと、海の中から何とも云へずいゝお聲がして來て、

「こゝにあり」

とお答へになつたので、入道は、

「聴いたかね」

と云ひますと、住持はこの御聲を聴いて、悲しいやら勿體ないやらで、ごろ／＼轉がりながら泣きました。入道も涙を流して、

「お前さんは早く歸りなさい、また七日経つたら來て、わしの最後の有様を見て下され」

「何か欲しいだらうと思つて干飯を持つて來ましたが」

「ちつとも欲しくなんかない。まだ有るよ」

と入道が云ふので、住持が見ますと、本當に前のまんま腰に挟んでありました。かうして後の世のことを契つておいて、住持は

歸つてゆきました。

その後また七日経つて行つて見ますと、前の様に木の股に西に向つて、今度は死んでをりました。見ると口から、とても美しい蓮華が一本生え出てをります。住持はこれを見ると泣きながら勿體ながつて、口に生えてゐる蓮華をば折り取りました。死骸を埋めようと思ひましたけれど、こんな人だからたゞかうして置いて、鳥や獸などに食はれようと思はれたのだらうと思つて、動かさないで、泣きながら歸つて行きました。そしてその後どんなになつたかも知りませんでした。

きつと極樂に往生した人でせう。住持もたしかに阿彌陀佛の御聲をお聴きして、口から生え出た蓮華を取つたのですから、定めて罪人ではないと思はれます。その蓮華はどうなつたか分りません。

どんなに悪いことをした人でも、本當に發心すれば、こんな勿體ないこともあるものだと言ひ傳へたさうです。(をはり)



谷中安規作並に畫

佛はつねにゐませども、うつつならぬぞあはれなる、人の醒せぬあかつきに、ほのかに夢の見え給ふ。

夜をこめて降つてゐた雪も、やうやく降りやんだあけ方近くの事でした。年をとつた尼さんが、雪にふりうづめられて眞白になつた町から町へと、ウロウロと歩きまはつてゐました。この尼さんはかねてから、お地藏さまは人の寝しづまつた夜あけ方になると、衆生濟度の尊い御祈願のもとにおあるきになると言ふことをきいてをりましたので、今生にただ一眼でもよい、お姿をお拜み仕様と、モウ久しい前から、雨につけ風につけ、この様にしてあけ方近くになると町近くの荒寺を出てさまよはぬ日とはなかつたのでした。それにしても一向、お地藏さまのお姿は拜めませんでした。だが、老尼は落膽しませんでした。

それは、いつかはきつとお地藏さまにお逢ひする事が出来る事と思つてゐたからです。だからこの大雪の日にも、いつものやうになじみの町筋をあちこちと、ありがたい經文を口のなかでとなへながら、あゝ老い先短い私の願ひどうぞかなへて下さいまし、と念じながら歩いてゐたところでした。をりからそこへ、夜通し博奕を打つて、元も子もなくしてしまつたこの町の無賴漢が通りあはせて、この老いた尼さんのヨボ／＼としていまにもよろめきかゝつて雪の上に倒れかゝりさうな姿を見とがめて、

「もし／＼お前さん、この寒いのに、なんでそこいらをうろついてゐなさるのだ」

と尋ねました。そこで尼さんは

「お地藏さまは、あけ方近くになるとお姿をあらはしておあるきになると言ふことをかねがねうけ給はつてをります。それで一度、有難いお姿をお拜みしたいものと、このやうにお尋ねしてあるいてをります」

と申しました。

「なに、お地藏さまをさがしてゐると言ひなさるか」

馬鹿々々しいと言ひかけて博奕打が急に口をつぐんだのは、心のうちでふとある事を思ひ附いたからでした。それでハタと手を打つて

「そいつは丁度よいところだった、お前さんがわしにお逢ひなさつたことはお地藏さまの御引合せと言ふものだ、お前さんがそんなにしてお尋ねなさるお地藏さまのお出でなさるところを、このわしはよく知つてゐるのだ、お逢ひ申させてあげませう、だがそんな結構なところへ、たゞでは連れてゆかれない、なにか下さればよろこんでお連れする」

博奕打はボツ／＼本性をあらはしかけました。老いた尼さんはモウ一心にお地藏さまにお逢ひしたいばかりで心が一杯になつてをりますので、

「私は貧乏でなにもさしあげるものとても御座いません、たゞこの身につけてゐる衣物でよろしければさしあげませう」

と申しますと、

「まあ仕方がない、ではお出でなさい」

と云つて博奕打は尼さんを連れてお地藏さまのところへ参る事になりました。この博奕打がお地藏さまを知つてゐるわけはありませんが、知つてゐる人に、ちぎう、と名のついた子供のをりますことを突作に思ひ浮べましたから、この老いぼれた尼さんをだます氣になつたのでした。そこで尼は博奕打に、まだひとつそりとねしづまつた町の雪道をしばらく連れてゆかれました。ほどなくして、博奕打はある家の門口にたちどまりました。それは、ちぎうと申す子供のすんでゐる家の前でした。博奕打が門口から

「おちぎうさんは」

と大きく聲をかけますと

「豆腐を買ひにゆきましたか」

とその子の親のねそびれた聲が奥の方でしました。さうして、朝早くから一體うちの小僧になんの用があるのかしらといふかりもしましたが、別に氣にとめる程のことでもなかつ

銃後の守りは婦人から



法然上人鐵仰會の婦人部になつてゐる貞恭婦人會では、兼々銃後の守りは婦人からの標語を生かして行き度いと心掛けてをりました。が、今回名譽の戦傷を負はれた將兵の方々をお見舞ひ申すことになりました。そこで、その寄金を集めるために、十錢づゝ入れて頂く、小さな袋を作りまして、全會員が總がゝりて、各方面の方一人につ



と申しました、ただモウ、お地藏さまを拜むことが出来るならばと、それ以外にはなんの考へもない尼は無道な博奕打の言ひなりになつて、たゞさへうすい衣のひとかさねをぬいでやりました。博奕打は引きはくやうにして、化の皮のあらはれぬさきにと、そゝくさと歸つて行

つてしまひました。

たので、そのまゝだまつてしまひました、無頼漢は少し耳の遠いらしい老尼の耳近くへ口をよせて、

「お地藏さまは、それあそこの町はづれの豆腐屋の門から出てこられる子供の方だ。サア教へてあげたから約束のものをもらひましよう」

尼さんはお地藏さまを拜まうと豆腐屋の門口さしてよろめいてゆきました。その時、年の頃、十歳ばかりの子供が豆腐のいれものをかゝへて出てきました。尼は急にその子の前にふしまろび、頭を雪にすりつけてをがみいりました。さうして、おそろくこの子供の

いて十錢づゝ御寄附を頂いた處、どこでも非常に喜ばれまして、またゝく間に、千數百人の寄附が集り、總額、百數十圓になりましたので、幹部の高瀬磯子さん、渡邊榮子さんなど數名の居々が代表となつて、この十月の始めに、東京陸軍病院に名譽の戦傷將兵を御見舞申しました。

千數百人の人々の心の籠つた花束やお菓子などの外に雑誌『浄土』を澤山持つて行きました。

お見舞ひに行つた婦人部の代表者達は、さへ何んと御挨拶したものであらうか、あんまりしかめ面をして行つてもいけないだらうし、あんまり輕々しい態度をしても良くないだらう。などと病院に着くまでにはずゑぶん氣を揉んでゐたのです。

ところが、病院へ入つて、兵隊さん達のところへ行きますと、戦傷の勇士の方々は、大變によろこんで、まるで百年の知己の様に話して下さるので、今までの心配などは

見上げますと、不思議なことに、尼の霞んだ眼の奥に、この腕白らしい子供の姿がかややくばかり端麗な地藏さまのお姿として拜まりました。尼は長い間の宿願もかなつた事とて手の舞、足のふむところもわからぬやうな有様で、をがみいつたまゝ、いまは衣をはがれた爲、こゝえ死にもしかねまじい程、寒くなつてゐる身體のことも忘れしました。子供があつけにとられて泣き出し相な顔をして走り去つた事にも氣附きませんでした。

なに分にも、長い間のあこがれであつた、お地藏さまの尊いお姿を拜むことが出来たため、その喜びは、いまゝで老尼をはりつめさせてゐた氣をゆるめさせたものと見えます、雪の上につぶせにをがみいつたまゝ、もう、立ち上る氣力もなくて、ジツとしてゐました、不思議なことに、さうしてゐると、うつとりする程、いゝ氣持になつてきました。やがて暖い雲のやうなものが下りてきて老尼をやはらかく、おしつゝむだばかりではありません。どこからともなく、金色の光がほ

のぼのとさしそりてきて、そのなかには澤山の佛さまの尊い御姿がをがまれました。さうして、佛さまの御一人が、大きな蓮華の花をもつて老尼の側へ近よつてこられたのでした。この様にして、老尼の信仰にとんだ魂だけが肉體をはなれその蓮華の上にかきのせられて、極樂淨土の方へと遠ざかつて行つたことでした。

あとには、この尼の瞑目合掌したまゝ、うつぶせになつたまゝの、みにくい今生の肉身だけが、道のかたはらへとりのこされました、降りやんだ雪がまたひとしきり降りいでて、美しい花びらの無數を音もなく、そのいたましい姿の上に散りかけてゐました。(終)

おなじ心に極樂を願ひ、念佛を申さん
人をば、たとひ卑賤の人なりとも父母師
匠にもをとらずおぼしめすべし。今生の
財寶のともしからんにもちからをくはへ
給べし。(法語抄より)

消し飛んで仕舞つて、見舞の婦人達は心置きなくお話しをして充分にお見舞の役目を果すことが出来ました。

勇士達は皆んなとても元氣で、戦場に行かれないのが一番残念だと口を揃へて云はれました。却つて慰問に行つた人達が慰められるやうな結果になりました。

勇士達が一番よろこばれたのは、雑誌「淨土」で、讀み物がなくて退屈してゐられる方々から大變感謝されました。或る將校は淨土宗の信者で、大變深い信仰を持つておられて、「淨土」を差上ると、その題字を見られて、「あなた方は淨土宗の方々ですね」と懐しさに云はれ、それから色々信仰談に花が咲き、婦人會の幹事達は逆にその將校に念佛信仰に就いて教へられたさうです。

婦人會の人々は大變力強い氣持で歸つて來ました。そして次の計畫を進めてをります。(をばり)

短歌

與謝野晶子選



一等 東京 三野輪 江雪

饗喰の栗の多しと蔑しつ明るき
雨を山路下り行く

(評) 平淡なる詩境に新味を

二等 上海濱邊 佐藤 末太郎

廣き野の果に沈まん赤き日をわが
見て立てり砲聲の中

(評) 實戦中の作としてそぞろに襟の正

三等 熊本 坂田 恭隆

戦勝を人の語れば笑ふくむ兵士の
母に心し泣かゆ

(評) 寂しき人の姿、勇ましき日本婦人の心
よく見給へり。

京都 郡司島 誠也

なす事もなく山里の庵に居て柿の
葉に散る雨の音きく

小樽 中村 もん

うちけぶる港の雨よ大船はドラ鳴
らしつつ岸壁を去る

奈良 奥田 秋郊

ほのぼのと明け行く遠き山並の上
に残れる白き月かな

大阪 青山 茂

試みに櫛の齒ほぐし見て胸をどる
なり春のそなへに

京都 永田 七郎

死ぬことを歸するが如く説き給ふ
佛のをしへ聞くぞ嬉しき

徳島 神原 梅

今ぞわれ永遠の救ひのみ光をうち
仰ぎつつ悦びに燃ゆ

山口 長岡 見智

曇り日の今日冷やけし何ごとぞ父
逝く日とは思はざりきな

京都 小山 繁

白き花蕾のままにしほむこと妹
逝きてさびしこの秋

大阪 吉廣 夏生

一死たゞ國に報ゆと出でて行くこ

のつはものよ妻子思はず

大阪 橋本 花汀

只一人知遇賜ひしわが舊主木犀か
をる日に逝きたまふ

和歌山 奥村 映水

號外のくるたび毎に病床の父はほ
ほるむ苦しみを置き

神戸 秋田 里二

雑木たつ庭ぐまにし柿の葉の朱
のこよなく愛でらるる頃

仙臺 三浦 順子

病める身は肌膚の末も老いませる
母にすすがせ縫はせつるかな

京都 永田 七郎

夢に怒り夢に悦ぶ人の世と悟りて
こころしづかなるかな

長野 中山 弘

何事もなかりし如く啼く蟲をきき
つつ今日の日記書き終へぬ

北海道 花田 順佳

來ん春はとにもかくにも暮れて行
く年こそいと惜しまれにけれ

小倉 益田 山彦

銃とらぬわれも朝夕み佛に祈るま
ことの劣るべしやは

東京 宇高一應

長しへのいのちのためにますらを
はみ法かしこみ今たちてゆく

朝鮮 羅江 八年坊

うたたねのひまにも物を思ふかな
罪業深きわが身なりけり

長野 長田 實景

弟は第一線に子は臥して女の涙
盡きぬ頃かな

静岡 一向 山人

氣安げに往診に行く三十を越えし
ばかりのわが村の醫師

千葉 高橋 美矢子

朝霧の見る間に晴れて美しく紫
はめる秋空となる

鹿児島 兒玉 扶美

明け暮れに君が武運を祈りつつわ
が取る鉄に力の充ちぬ

埼玉 西澤 政子

父母の歎きもしらずみ佛の恵のか
げにあるなり我が兒

京都 三田 安源

親として生みつる子等は多くとも
なさけに隔てあるべくもなし

東京 喜代子

煙爲事たのしく終へて親も子もと
し灯かこむ小田の一つ家



小 説
救 護 の あ る 人 生

吉 田 初 太 郎
中 島 松 二 畫

昔 の 友 達

時田氏は、朝のうちに、いつも大川端を一廻りすることにきめてゐた。濱町河岸の白い道、水垢をつけた杭、柳、棧橋、川向ふの一つ目橋、川蒸気船……そして新大橋からはから濱町の清正公の寺内を抜け樹の多い閑静な町すちを濱町一丁目へ下つてきて、久松町、村松町、若松町へと出るのであつた。勿論、この話は震災前、明治四十年代のこ

とである。

ある日、時田氏は若松町八番地の角から橋町三丁目の方へ曲らうとして、

(おや?)

と、眼を睜つてしまった。出會頭に立止つた長いマントを引ずるやうに被つた男は、まぢまぢと時田氏の顔を見成つたが、(あゝ!)と表情を明るくすると、丁寧に帽子を脱つた。

「市川權三さんでしたね?! すつかり、お見せしましたよ。」

舊い歌舞伎俳優時代の名題名を呼ばれた時田氏は、白粉麝のした相手の顔を見返して、

「澤村答藏さんでしたね。この御近所にお住ひですか?」

と、きゝかへした。

「私は四五日前、橋町三丁目十五番地、牛乳屋の横に引越してきましたが、權三さんは?」

「僕は六番地、ひとつ手前の露路です。」

「すると、いまは?」

「私塾の先生……受験準備や豫習に、小學生たちに代數とか英語とかを教へてゐます。」

「あゝ、あのころから讀む方は好きでしたね。それにしてもあなたはよい家柄のお家に生れたのに惜しいぢやありませんか?」

「義母がなんとかしませうさ。もう歌舞伎俳優の足を洗つたいまでは一切、きゝもしなければいひたくもないのです。ところで君は?」

「帝劇と、斷りきれないので蓬萊座とをかけ持ちしてゐますが、たいしたことはありません。」

しかし、男衆と弟子らしい四十前後の男をつれた答藏の顔には得意のいろがかくしきれずにあつた。

それから二言三言話し合つて別れたのであつたが、たつた一人になつて藝物問屋、木綿問屋、染料問屋の並んだ町を歩くと、妙に氣が滅

入るやうな、心の底に白いもやもやとしたものが残るやうなうすら寒さを感じた。華やかさ、明るさといふものが答藏といつしよにずうと自分から根こそぎ離れて行つてしまつたやうに感じられた。

家へかへつて、妻君に話すと、「あなたも本當なら……」と淋しく首垂れてしまつた。屹度、亡父の名跡を襲うて歌舞伎座の座附俳優で弟子の十人や十五人を擁へて……といはふとして、急に淋しくなつていへなくなつたのであらう。

時田氏は、明治初年から中葉にかけて、團菊左と併び稱されたほどの名優河原崎玩十郎の子であつたが、性來の學問好きと、父の死後、義理の母との面白くないいきさつから家を出、俳優生活も止めてしまつてゐるのであつた。

妻君の寂しい様子を見ると、時田氏は力づけるやうにいつた。「芝居のことなんか僕は何んとも思つてゐないよ。それよりも、僕は生みの母親を探したいのさ。僕を生んでくれた母親が何ういふ人か、その素性を知りたいだけさ。」

妻君は、いやな顔をした。

時田氏の父たる名優は、當時一世に悪名をうたはれた夜嵐お絹といふ毒婦や身分の高い女性たちとも情事關係があつたりしたのを妻君も知つてゐるので、餘分に、時田氏が生みの母親を氣にする氣持をいちらしく感じるのであつた。

「僕の母親が、身分の高い人で、いまの何某男爵とか公爵とか種違

ひの弟だつたりしたら滑稽だね。」

「もう、その話、おやめにならない?」

「うん、止さう。あんまり愉快ぢやないからね。」

そして、時田氏は、宙に一族の萩と、四疊半の茶室めいた薄暗い部屋とを浮上らせるのであつた。その部屋とその一族の萩とは、時田氏が父に引取られる四歳の年まで住んでゐたなつかしい家の一部であつた。

いまから二十何年もの昔のことと、もうすべてのことは忘れてしまつてゐるが、奇體にその萩と茶室めいた部屋の記憶だけが残つてゐるのであつた。

（あゝ、あの家さへ判れば僕の母の素性も判つてくるのだがなあ?）
時田氏はもどかしさうに、ほつと溜息を吐くのであつた。

公 憤

ある晩、思ひがけなく時田氏は澤村答藏の弟子の訪問を受けた。いつか答藏と若松町の角で行會つたときには、つましく師匠の後ろにゐた四十前後の男で、桃藏といふ歌舞伎名を持つてゐた。

桃藏は、時田氏に丁寧にお辭儀をすると同時に、

「おたすけを戴きにまゐりましたが、御承知下さいませんでせうか?」

と、怯えるやうにいつた。

「いゝえ、お金や、着物、そんなものゝ御無心ではございません。一

つ、わたくしどもの座頭になつていたゞきたいと存じてお願ひに上つたわけですが……」

「芝居だね?」

時田氏は敷から櫓の申入れに、實はあまりいゝ顔をしなかつた。

「御存知のやうに私ども下廻り役者は、田舎の祭禮や小芝居から買ひにくるので、女房や子供に美味いものを食はせることも出来ませんが、それがなければ到底生活が立つて行けません。ところがいゝ工合に大森から村祭の餘興にといつて買ひに來ました。」

早速、人を集めた。ところが先方では座頭として名題俳優を一人せひともつれてきてくれといふので、桃藏がこはこはながら、師匠の答藏に、多くの下廻り連中を助けると思つて座頭になつてくれと頼むといきなり横顔を撲り倒されたといふのである。

しかし、彼等は何うしてもこの祭禮の餘興の口を逃がすことは出来なかつた。一晚の興行で、三百圓近い大金が下廻り連中の懷中にころげ込んで來るのであるから、いろいろと名題俳優へも運動したが、誰も氣持よく一座の上置になつて出勤することを承知してくれないのであつた。詮方つきた彼等は、時田氏が名優の子に生れ、曾つては市川三といつて名題の花形俳優だつたのを思ひ合せ、頼みにきたのであつた。

時田氏は、その話をきくと、公憤を禁じ得なかつた。自分の弟子たちに満足に飯も食はせることも出来ないくせに、折角、その弟子たち

が金儲け仕事にありつけようとする
と、助力もせず、そつぽを向いてゐ
る答藏のやうな、薄情者の多い芝居道
といふものに、心からの嫌惡をかん
じた。

時田氏が、

「よろしい！ その上置の俳優にな
つてあげよう！」

と、力強い聲でいつたのは當然の
ことであつた。

そして第一を、「關原多助一代記」、
第二を「梶原平三紅梅報」、星合寺の
場、第三「かつぼれ」——と狂言を
決めて稽古にかゝつたのはそれから
間もなかつた。

搖籃の家

時田氏は目立つて明るくなつてき
た。一座の下廻りの役者たちをたと
へ一時的にもせよ經濟的に救へたと
いふことは、心遣いしたことであつた。



澤村答藏の男衆が、桃藏の重態を
傳へたのはさうした日であつた。桃
藏は、村祭の夜に風邪を引いたが、
それが重つて肺炎に成つてゐるとい
ふのであつた。時田氏は愕然として
色を喪つてしまつた。

「それで、いまは？」

ときくと、

「私が會つたのは四五日前のこと
でしたが、四十度近い熱がずつとつ
いて、讒言ばかりいつてゐました。」
と、男衆は答へた。

「醫者は？」

「この峠が持ちこたへればといつて
ゐましたが、さあ何うなりませう
か？」

時田氏は、自分にも責任があるや
うな氣がした。そこで早速、見舞ひ
に行つた。

淺草の田中町にある桃藏の家を、
やつと探しあてると、櫛巻にしたか

みさんが、内職の紙袋を作つてゐた。かみさんは蒼白く寝た顔に血の氣をのぼらせて、

「まあ、若旦那さままでございますか、お初にお眼にかゝります。」

と丁寧にお辭儀をした。

「御加減が悪いさうですが、もう……」

六疊一間と豪所らしい住居のどこにも、桃藏はゐなかつた。一時は生死のほど氣遣はれた桃藏の病氣は、奇蹟的にも持直して熱も日ましに下ると、醫者はこゝでは座敷も狭いし空氣も病人のためによくないからといつて、根岸にある自分の隠宅に移らせ養生をさせてゐるといふ話なので、時田氏もほつと安心した。折角、こゝまで來たのだから、その根岸の隠宅へ廻つてお見舞をしたいといふと、かみさんは喜んで氣輕く立上つて、では御案内をいたしませうと先へ立つた。

そのころ電車は坂本二丁目までしか通じてゐなかつた。その終點の坂本二丁目を左へ入つて、ゆるい勾配道を行くと、竹垣や板塀がついて樹立がその内側から、すくすくと枝を擡げてゐた。時田氏と桃藏のかみさんとは靜かな小路をいくつか右に左にまがつた。すると藪が多くなり、木口もつくりも古めかしい家が、水の少ない溝に板橋を架けたり、飛石つゞきの果に棧の目のこまかい格子戸を見せたり、苔蒸した燈籠、枝折戸などを風雅を競つてきた。

「こゝでございます。」

かみさんが立止つて示したのは、仄暗い玄關に電燈が吊られてある

古風な寂びた家であつた。かみさんが案内を乞ふと、上品な切下げ髪のお婆が出て來た。切下げ髪の御隠居は彫の深い品のいい顔に、微笑を湛へてゐた。

案内されたところは茶室めいた古めかしい一間だつた。ふと庭を見ると一簇の萩があつた。時田氏は、それを見た瞬間、背すぢにずうんと冷たいものが走るのをかんじた。この茶室めいた一間といひ、庭の萩といひ、自分の夢にも忘れない記憶のそれとびつたり合ふのが怖ろしかつた。

「こゝだ！ 長い間かゝつて探してゐた家はこゝだ！ 四歳まで自分が住んでゐた家がこゝだ！」

時田氏が心をふるはせながら、

「もう長いこと、こゝにお住ひですか？」

ときくと、

「昔は、姉の子がこゝに住んでゐました。姉の子が……」

といひかけて、御隠居は、はつとした。

「あなたは、河原崎玩十郎の息子さんでしたね……」

「左様です！ 河原崎玩十郎の息子で市川權三といったものですが、

いまは役者を止めてゐるものです。」

時田氏の眼がしらには水ぼいものが嵩んできた。

「僕が父の玩十郎に引取られる四つの年まで住んでゐたのがこの家らしいのです。……さあ教へてください。あなたは御存知の筈です。あ

なたの姉と仰有る方はどんな素性の人です。」

御隠居は臉に手を押當てゝしまつた。

不思議な運命とでもいふのであらうか、時田氏は桃藏の病氣見舞に來て、ゆくりなくも自分の幼年時代を送つた搖籃の家を探しあてたのであつた。

お絹の墓

しかし、その御隠居は時田氏には、何故か生みの母の素情を語つてはくれなかつた。

あなたのお母さんはもうこの世の人ではない。素情は絶対にわたしの口からは語れない。また、御存知でない方があなたのためと思ふ。

……その御隠居が涙とともに語つたのはこれだけのことであつた。

「それでは、せめてお墓だけなりとお詣りをさせてください！」

この時田氏の最後のねがひが、きゝ届けられたのも、やつとのことであつた。

その翌日、時田氏が教へられた寺の境内へ入つたのは朝もまだ九時にならないうちであつた。

本堂から左に折れて、敷石道を眞つ直ぐに行き、一番奥から手前へ三側目といふのだつたが、そこまで歩いてくると、

「時田さん、こゝです！ こゝです！」

と、呼ぶ聲がした。見ると、昨日の御隠居、いまは紛れもない肉身の叔母が、墓地の生垣のほとりに立つてゐた。

墓には菊の花が線香の煙のなかに、楚々と白く浮出てゐた。

「あなたのお母さまのお墓でございますよ。ようく拜んであげなさい。きつと喜んでをりませうよ。」

お墓は立派なものであつた。

墓の横には誰れが献げた菊か山茶花かダリヤか、片附けられた花束が堆く嵩んであつた。

「随分、たくさんのお花束ですね。こんなにお詣りをしてくれる人があるんですか。僕の生みの母は餘程身分の高い人だつたのですね！」

心からの禮拜をすませたのち、時田氏が愉しさうにかういふと、御隠居の眼は、劫えたやうに隣りの墓地の生垣の根にそゝがれた。

そこには、今朝、この御隠居が、急いで墓の前から引抜いて、かくしておいた立札が、朝の陽光に、ひつそりと光つてゐるのであつた。

「夜嵐お絹の墓」

立札にはさう書いてあつたが、時田氏はそれには氣附きもしなかつたので、いよいよ面を明るく輝かせて満足さうに墓石に献げられた数多い花束を見成つてゐたのである。

佛教常識

成道會

十二月八日は成道會に當りますから、それに就てお話し致しませう。

成道とは佛になると云ふことです。だから「成佛」とも「得道」とも云ひ或は「成正覺」とも云つて居ます。通常釋尊が佛

に成つた日を記念する爲に古來から「成道會」と云ふものをも致しましたのです。近頃佛教青年會などでは「悟りの夕」として十二月八日に成道會の集りを致して居ります。

普通に「臘八」と云つて十二月八日と定めて居ますが、異説も二三あります。我國でも古い處では三月十五日にしたやうで

す。即ち「延喜式」第二十一雅樂寮の條に「西大寺、三月十五日成道會云々」と出て居るさうですが、鎌倉時代から「十二月八日」になつたと云ふことです。之は支那の曆の相違かららしいです。

また釋尊成道の年齢に就いても異説があります。即ち三十、三十一、三十五などです。今では大體三十五歳成道説が一般に用ゐられて居ます。

釋尊は跋伽婆や阿羅邏迦藍や優陀羅摩子などの教を受けたけれども意に滿たず、遂に西南尼連禪河を渡つて伽耶城附近の林に入り大修行に取りかゝつた

のでした。

其頃父王から差遣された僞陳如などの五人の人達と一處になつて六年間苦行をしました。一日に一粒の米、一粒の胡麻と云ふやうな極度の減食などもしましたが、苦行は本當の道でないを知つて河水で垢を洗ひ托鉢に出かけたのでした。

五人の比丘達は之を見て

「彼は苦行の爲に心が亂れて多慾になつた」と誤解してイシパタナと云ふ處へ行つてしまひました。釋尊はそんな事にはかまはず、優樓比羅村の村長の娘ナダバラの獻ずる乳糜を飲んで元氣になり、畢鉢羅樹(菩提樹)の下で草刈人のソツテイヤから草を貰ひ受けて結跏趺坐し

「成道しなければ此座を起たぬ」と云ふ大決心で瞑想に入つたのですが、其時色々精神的な誘惑や幻覺なども起つて心が亂れかけようとした事も度々あつたのですけれども、それらを一切悉く屈服させて終に十二月八日の天明に及んで「一切知」を得、一聲高く合掌して

「南無佛」と叫んだと云ふ事です。其時詠つた詩に「家の建造者を求めつゝ夫を見出し得ず、流轉して幾度となく苦しみを受けた。然し家の建造者よ。汝は今も見出されたのだ。私はもはや家を造らないであらう。梁や棟木は砕れ、心は滅盡の境に入つて、

砕れ、心は滅盡の境に入つて、

愛欲は斷滅したのだ」と。
 之が釋尊の成道の有様だと云はれて居ます。色々の經典にはかなりむつかしい言葉を並べて其時の悟りの状態を細く説明して居ますが、結局譯が解らなく

なるばかりですから、今は之を略して置きます。然し根本的なものは「緣起」と云ふことを本當に悟つたのであらうと想像致します。

「緣起」とは簡単に云へば「一



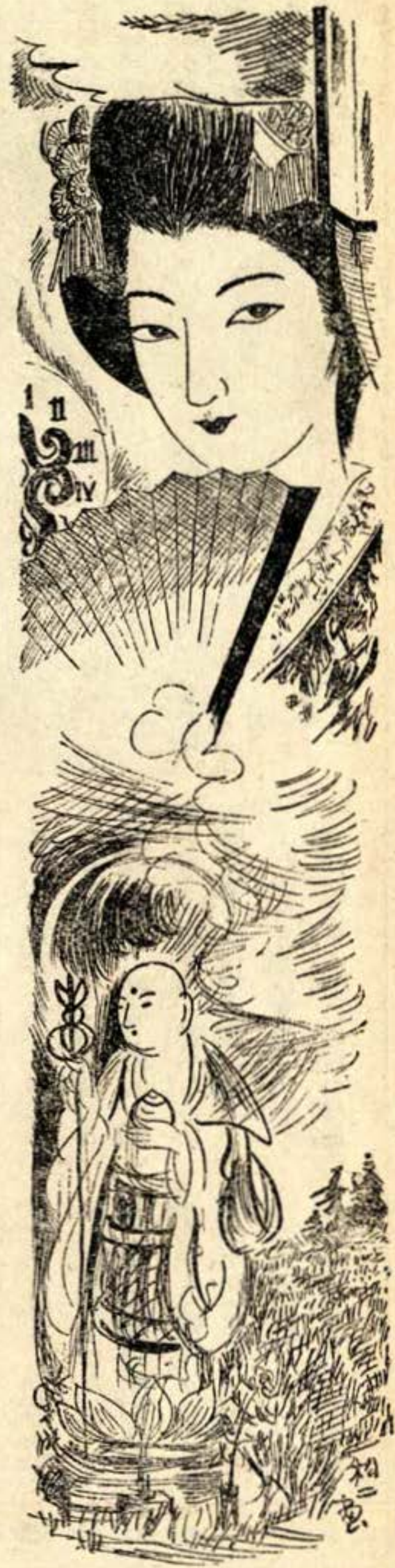
釋尊と諸魔の誘惑。
 野生司畫伯とその大膽畫。

切の諸現象は天地人一切の諸條件の集成化合に依て現はれ、常に刻々に變化して行く。随一つとして固定して居るものはない。そして我と執着する者もない。皆な一切の御蔭に依て成立ちそしてお蔭の儘に進展して行くのみである」と云ふ事です。だから其天地一切の御蔭に對して「南無佛」と唱へた譯であり、其天地一切の御蔭こそが宇宙の「大生命」であり、其「大生命」こそが「覺醒の根元」として自分を覺醒させて呉れたのであるから、念々に「南無」し「歸命」し行く處に、刻々に覺醒し行く「無上道」即ち極みなき道が與へられると喜ばれたのではないかと思ひます。

之は誠に常識的に釋尊の成道を見たもので、他の先輩からは「釋尊を冒瀆するもの」との御叱りを受けるかも知りませんが後世釋尊をいやが上にも高い處に祭り上げた爲に、私達人間には手が届かず全然かけ離れた「神」として想像だに許されなもののやうに感じさせたのは少し何うかと思ひます。

若し人間と全然違つたかけ離れた人ならば、私達の耳にいくら釋尊が御話し下されても其教が解る筈がありません。私達に多少でも解る處に人間的な手懸りがあるのでないでせうか。

そして私達が釋尊の教に依て少しでも覺醒することに精進して行ければこそ「成道會」をも行つて修養にいそしむ氣にもなれるのではないでせうか。



洪 水 異 聞

(後編)

梅 澤 義 明
中 島 松 二 畫

郭 公

この村に水が入つたのはあれから間もなくの事だつた。その頃は一軒々と村の家の隅から隅まで覗いても何處にも米一粒無かつた。臺地へ上つた村の人達の頭の上では一日鵜が騒いで居た。それでも作兵衛は決して我が家

を動かうとはしなかつた。床まで届きさうな家の中にあつた。只一所に座し、眼を閉ぢて長考する日が續いた。昨年まで若者のやうに走り廻つた作兵衛のその姿は今はどこにも見出せなかつた。豊吉がどうにかすると云つて、一合でも良い五斗でも良い、一粒の米でもと、川下隣りの新川村へ仕事に行つたのは

一昨日の事だつたが、今日も歸らなかつた。何を思つたか作兵衛は長年臺所の隅に轉つてゐた長持の中から三俵の米を伸びない腰を伸ばしつゝやつとの事で自分が今迄坐つてゐた席へ持ち運んだ。やがて運び終へた時はもう動けずにヘナヘナと俵に凭り掛つてしまつた。米がある。飢餓の民は群をなして作兵衛の家へと殺到した。併し人々が歸へる時は誰一人人口もきかず、やがて作兵衛を罵る聲が勃々として人々の間から起つた。佛の作兵衛と云はれた彼も、今は村人にありとあらゆる悪口、難言を浴びせられるのだつた。彼等が如何程

嘆願しても 自分も食はないのが皆のものに
も食はせられぬと、何んと云つても俵の前か
ら一寸たりとも動かぬ作兵衛老人であつた。
村の人達は、血も涙もない老人よと怒り罵つ
ても、只彼は魂の無い人形の如くなんの表
情もなく依に凭りつくすのみだつた。

悄然として歸へる村の人達が、どんなに飢
ゑてゐることも知らず、夕日は眞紅に西の空
に輝き、夕焼雲が空一杯に擴つてゐた。

やがて夏の夕暮れの残映も消えゆく頃、糺
の森に飢餓の人々が木の葉や草の根を焼いて
ゐるのか煮てゐるのか、影薄い火の光が二つ
三つと哀れにも螢火かと思はれる程小さく作
兵衛の眼に映る時、その小さな火から彼は針
でも、つきさゝれるやうな耐へられない程の
痛味が腫の奥に染みるやうにうづくのだつ
た。

「父ッさん、今けへつたよ。」

我が子の聲にハツと驚けば、水入り時の用
意の食物でもと、働きに出てゐた娘お才が瘦

衰へてぎこちない戸を開けて這入つて來た。
薄暗い家の中にあつて鄙に珍しい程の色白な
美しい顔がボウと浮いたが、次第に烏田に結
うた髪も亂れ、黒く澄んだ眼もくぼんだお才
の顔の輪郭が明瞭として來た。

「おゝ、お才か待つてゐたぞ。」

「豊吉さんは。」

「あの人も働きに一昨日出たつきり、けへつ
て來ねんだ。」

彼女は張りつめた氣も弛んで上り框に坐り

こんでしまつた。

「うん、父ッさん……駄目だ、何處もひどい
や、上郷から岩槻の方迄随分探したが、仕事
が無いんだよ、もう小遣は無くなるし、しよ
うがないんで歸つて來たよ、悪く思はねいで
ねえ。」

「なんのく悪くなど思ふものか、まあ早く
上れ……さつき村の家が大勢來たよ。儂も、
もうすつぱりと覺悟しにやならなくなつた
よ。」

「父ッさん、顔色が悪いよ。眞蒼なもの。」

どうして大勢來たんだい。」

脚半を解きながら父の後にある三俵の米俵
を見たお才は驚きのあまり口もきけなかつ
た。眞紅な唇がワナワナと顫へてゐた。

「父ッさん、そゝゝゝ、それは。」

作兵衛は項垂れてゐた頭を上げて、氣でも
違つたやうにお才を己が膝元に引き寄せた。

「お才、これはな、あの臺所の隅に穀殻の這
入つてゐた長持の中へずつと前から入れて置
いたもんなんだ。」

「そんなら、そんなに瘦こけてゐねえで、食
つたらいゝのに。なんだねえ、そんなに考へ
こんで」

「お才、とう／＼覺悟せにやならねえ時が來
たんだよ。」

「いえ、そんな縁起でもねえ。」

「なあお才、縁起の良い悪いいは、世の中の
變かな時の事だ。かうなつちや仕方ねえ。」

作兵衛の聲は次第に細くなり、上げてゐた
頭も何時しか伏せてゐた。お才だけが常に變
つた父の様子に泣きたいやうな氣持で、とも

すれば倒れ掛る父の軀を夢中になつて支へてゐた。

「なんでも良いから、父ッさん、それを食つて元氣になつたら。」

優しく下から覗き込むお才の軀をはねのけて作兵衛は大きな聲で語りだしたが、それもやがて低く低く細くなつて行つた。

「こら……お前までそんな事を言ふ、この米を食ふ位ならこんなに瘦ちやゐねえ、お才お前には、はつきり話したことはなかつたが、こりや實は米ぢやねえ、穀種だ、——こんな事があるだらうと思つてゐたからこそ、お前にも豊吉さんにもいれえ骨を折らしたんだ、去年水入り前、千間沼の田圃へ土手を築いた、儂と豊吉さんで、『作兵衛の物好きがまた何か初めたで、あんな事をしたつて、何かとれるもんか。』て笑はれたぢやねえか、『土鼠が山を築くやうなもんだ。』て、でも三人はな、お前は水を汲み出す、儂と豊吉さんで精限り根限りやつと田らしくして、やうやく獲つたのが、この俵だ。あの時、お前にも、豊

吉さんにも賣つたと云つて見せずに置いたこれた。食へば三月半年は命をつなげるかも知れねえ、施米をすれば村の衆が三日や四日ありつけるだらう。——

だがそれきりだ。お才、よく聞け、農は國の本だ、農の本は種だ、一粒が千粒萬粒になつてこれからの人達を養つて行き村を國を榮えさせて行くのだ、この種を食つてしまつてどうなる、この洪水のあげくには穀種など、げず一粒もねえだらう。俵を守らうとするのはそこだ。然し人間はなあ、窮すれば鈍する、命の瀬戸には後の事など考へないのが人の常だ。村の衆はまだ今の處は生草を食つても生きて行ける、心配なのは冬枯三月だ、お才、親として唯一人の娘に頼みかねることだが、儂の云ふ事を聞いて呉れるか。」

「アイ……父ッさんが、そんなにまでして心配してゐるんだもの出来る事ならなんでも……」

可愛い子の可憐さに我が子を抱き締めるより先きに涙が込み上げて來た。

「然りか、すまねえ、お前濱へ行つて呉れるか。」

「濱つてどつちの方。」

「江戸のずつと先きの港だ、お前がまだ小さい時一寸行つたことのある市三おつさんのゐる處だ。」

「そこへ行けば何か村の……」

落ちる涙を拭ひつゝ、語る作兵衛の心は、云ひ知れぬ愛着と、表現し得ぬ寂寞とが、彼の心の中で旋風の如く吹き狂ふのだつた。

「儂はかうやつて毎日々々考へ込んでゐてふと夢のやうに思ひ出したんだ、お前が小さい時、お前のお袋が死んだ時、兄いや市三どんが來てな、珍らしい濱の話や、異人の話をした時、唐人お吉といふ、けなげな女子の事を話したよ、お國の爲に毛唐に身を賣つたといふ女子の事をなあ、毛唐は、はかり知れねえ程の金持だつさ、江戸の御米藏を十も二十も買ふ金を持つてゐるつてだ。それで日本の女子とあれば金に糸目はねえさうだ。お前も水呑百姓の儂の子だが幸か不幸か、みめよく生れ



て来て村小町だ何んだ
と云はれる級量、みが
けばどんなにでも綺麗
になれる、……さうだ
何んとか云つたなあ、
うむう、——ラシャメ
ン、然うだ、それにな
つてこの村を助けて呉
れるかい。

「お父ッさん……」

お才は只に泣くだけ
であつた。その涙の中
で繪草紙で見た、黒船
と、眼の玉の青い、赤
ちやくれた毛、獸み
たいな毛唐人が怖しい
姿となつて夢幻の中に
彼女をせめるのだ。い
くら村の爲とは云へあ
んな奴へ、日本の女が
身をまかせるなんて、

どうしても承知はしなかつたが、父の兄であ
る市三おつさんが戀の遺恨から間違つて人殺
しをし、生きて居られぬのを村の衆の情で濱
へ落され、父の作兵衛も何んの罪も受けずに
濟んだのはみな、名主さま始め村の衆のお爲
と諭されてやつと承知をした時には夜もいた
く更けてゐた。

「お前も儂もかうして暮して來されたのは誰
でもねえ、みな村の衆の爲なんだ。今の若い
人は知らねえが、年寄の人はみな知つてゐるん
だ。市三おつさんの事をな、その時儂は眼の
黒い中にこの御恩は命にかけてもかへすこと
だと儂の胸に誓つたんだ。お才今こそその時
が來たんだ。儂の背負ふべき荷物をお前にま
でわけける事は濟まねえ……」

儂は間もなく死ぬ、死靈になつてもこの種
種を守る。けれどこの種を守るには村の人達
をみんなの衆をあんまりひどく飢ゑさせては
駄目だ、どうしても多枯三月をしのぐ百や二
百の米俵が入用なんだ、お才濟まねえ……か
うした因果な親となり子となるのも前世の約

東事だ、米の代になつてくれ……。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハマイ行つて呉れ——。」

「父ッさん、行くよ。」

お才さいの臉おもてにも血ちのやうな涙なみだが一杯いっぱいに溢あふれて
ゐた。

「さうして呉れ。」

作兵衛は手を合して己が娘を伏し拜んでしまつた。

「でも豊……。」

「人一人に人の事はいけねい、
豊吉さんとも逢はぬものと諦らめて呉れ。」

その儘二人は相抱いて泣きに泣いた。市三
おつさん宛の手紙一本を帯深く入れ、只一枚
の晴着を着て、總べてを諦めてお才が家を出
ようとした時。作兵衛は

「お才、もう一度、顔を顔を……。」

「ではお父ッさん、たつしや——後はなんにも云はねいで……。」

お才は涙をはらつた顔をたつた一度振り向
けて闇の中を消えて行つた。その後、彼女
の咽鳴が悄々と寂しい夜氣を打つてゐた。作兵

衛（あ）はそれきり倒（た）れた儘（まま）起き上（あ）らなかつた。

流れ星

その次ぎの夜。村の名主祐之丞は作兵衛を訪れてゐた。年は五十近いが、立派な鬚が胸までたれ靜かに穩に作兵衛と相對してゐるものゝ、どことなく焦躁しきつた所がありありとその總べての態度から察せられるのだつた。

「作兵衛どん、貴方あなたにお願いに來た、御承知ごしりぞの様な有様ありさまで、儂わしの藏くらにも米こめはない。村の衆もろが作兵衛どんのところにゑると騒さわいで仕方しかたなく出でむいた譯わけだ。」

作兵衛は閉ぢてゐた眼を僅かに開き、黙つて會釋した。

「何んとか都合して下さるまいか。」

それを聞くと作兵衛は薄眼に開いた眼をかつと見開き、名主の方へにじり寄つた。

「名主さま、貴方様まで、そんな事を言うて下さる。今こそ残る處はねえ、名主さま、聞いて下され、……」

米俵を指差した作兵衛老人は後幾何もな
く来る死を悟つてか、必死になつて説くので
あつた。その言葉も次第に小さくなるのだ。

「名主さま、こ……こ……これは米ではござんせぬ。粃種でがす。名主さまこれを村の衆で食つたつて三日とはもちますまへ、この水入りの後に、この村を立てゝゆくには何が大事かと云ふにこれより大事なものは他にありませんまい、農は國の本、種は農の本だ。」

恥入る名主の眼には深い深い感動の色が一杯に満ちてゐた。

「成程々々。」

「名主さま、その種をきらしてしまつて、その種を食つてしまつて、この村は……一粒の種は千粒も萬粒……これから澤山の人達を生かして呉れるです。名主さま、作兵衛臨終の願ひを聞いて下され、僕の命も半刻と持たねえ、死んでも僕は守りますが、貴方様もこれをどうか守つて……下せい。『悪い後は良い。』こんな三年も續いた水入りの後は、年が明ければ春、これが残つた人に蔭かれ、青

青と伸びて秋は黄金の波をうつでせうや。作兵衛はそれを考へるとあの世でその黄金の波の音を聞くのを何よりの楽しみに死んでゆきやす。……。」

次第に衰へた聲はもう續かなかつた。

「済まなかつた、作兵衛どんあゝ……しつかりしねい、命にかけてこの祐之丞あんたの志をついて進ぜる、しつかりして、作兵衛どん、」

「名主さま……よろしくたのみます。……お才が、お才は——」

「い、え、娘さんが、お才さんが、あゝ。」

その時はもう作兵衛は名主の腕の中にあつて事切れてゐた。満足さうな死顔であつた。

丁度其の頃。豊吉は新川村との境堤を守つて呉れとの作兵衛の命により、松三と二人水當に立つてゐた。七、八丁上手に新川村の水音が屯してゐるだけだつた、新川の衆もまさかと安心してゐるらしかつた。この堤を切れば新川村に水が這入る、然うすればこの村は

少しでも助かる。その噂の中にあつて無氣味な程の殺氣が漲つてゐるのだつた。二人は黙つて、叢の中に腰を下してゐた。豊吉にはお才の白い幻像がラシヤメン姿となつて浮く度に忘れない苦痛がムラムラと炎の如く沸くのだつた。その時黒い三つの影法師が三丁程下手の堤の一角を崩し始めた。それを見た豊吉はやはり作兵衛さんが案じられてゐた通りだ。今それが起りつゝあるのだ。

「松三さん。名主さまへ……」

豊吉は立ち上るなり叫ぶと駆け出して三人の者をつき倒すのと同様だつた。

「お前さん達、こゝを切つてどうする意なんぞ罪もねい。隣村の新川の衆を、いゝえ。切つたつて村は幾分助かるだけ、今度は隣りから先きが苦しむんぢやござんせんか、私らは毎年の事、馴れてゐやすが隣の衆は、いゝえ、御三人さん。」

豊吉の論す聲が名主へ起る松三の耳に傳いまでに響いてゐた。

「うるせいやいこの野郎。」

三人の手の鐮が高く上つた。聞き入れない三人は豊吉に打つてかかつた。それから間もなく彼は我に返つた時には三人の者を叩き殺してゐた。

「作兵衛さん、許して呉んねえ、私はやつぱりやくざだつた。」

その一語を最後に彼は江戸川堤から怒り狂ふ濁流へ身を投げた。何處かでお才が彼の名を呼んでゐるような氣がした。

明日もまた、けろつと天氣で太陽が飢餓の民の頭の上に輝るのだらう。夜空には星が一杯に瞬いてゐたが、流れ星が一つ尾を曳いて流れた。續いてもう一つ尾を曳いた。

それからしばらくの後、この村へ謎の救助米が來た。名主によつて始めて作兵衛の眞實が明かされた。村の人達はみな作兵衛大明神と狂喜合掌した。新川村の人達は豊吉に救はれた堤に地像を立てた。明治初年の川添ひの村に起つた悲しい事實の談だつた。



念 佛 爆 彈

— 戰 死 者 に 贈 る —

中 野 尅 子

地雷火は

踏まれると同時に、

自ら地雷となつて

爆發するところに、價值がある。

踏まれても

不發のまゝで

爆發せないやうな地雷火なら

「地雷火」でナイ。

念佛も

自ら「念佛」となつて

爆發するところに「念佛」である。

踏まれても、蹴られても

爆發せないやうな念佛なら

「不發の念佛」である

「不發の信仰」である

死んだ「信仰」、死んだ「人間」である。

アナタが出征なさる時には

「死んで来い！」

と、餞別に云ひ贈つたが、其云つた通り、

死んで歸られた今となつては、何んだか濟

まぬやうな、申譯ないやうな氣がしてなり

ません。者し、矢張り

「死んで歸られた——」

ことを有難く、勿體なく、尊いことだと、

謹しみ謹んで厚く御禮を申し上げます。

私は矢張り「死んで歸つて——」貰ひた

かつたのです。死んで歸る——とは舊い過

去のアナタに死に切つて、新しく生れ更つ

て歸つて来て貰ひたかつたのです。新しく

凱歌に輝いて凱旋勇士として歸るか、或は

白衣の勇士となつて歸つても、立派に過去

のアナタでない、戦火の洗禮を受けて雄々

しく、氣高く、力に充ちて、新生の信人と

して華々しく、アナタの笑顔の還られる

のを迎へたかつたのです。ところが豈圖ら

んや、「新人」は新人、眞生の大信人ではあ

りながら、「沈黙の凱旋勇士」として今迎へ

よりとは、全然期待せぬことではなかつたが、餘りにも悲痛な、哀悼の極みであります。而し、よく

「死んで下さつた——」

「立派に戦死をして下さつた——」

私は嬉しい。私は尊い心で一杯です。人間いつかは必ず死なんならぬ。アナタでも私でも必ず死なんならぬ身です。病氣で死ぬか、戦争で死ぬか、何かで死なんならぬ身です。同じ死ぬなら、その死に方が、少しでも國の爲めになるやうに、世間の爲めになるやうに、人の爲めになるやうに。長生きしても世間の爲めにも、人の爲めにもならず、却つて人を苦しめたり、人を怒らしたり、人を歎かしたりするやうな生き方なら、永生きしても決して自慢にならぬ。幸福でも、価値でもないのです。

その事を思ふと若いアナタが、私や、アナタの御父さん達を出し抜いて、尊い立派な死に方をして下さつたことは、本當に心から、尊いことだ、素晴らしい事だとお敬

ひします。アナタのお父さんや、お母さんは成程歎いてみえます。歎いてはゐられるが、父母を歎かした以上にアナタは親や、世間や、上一天萬乗の陛下に對しても大きな孝行をしてゐられる。矢張りアナタは偉かつた。アナタは大きな得をしなすつたのだと私は思つて居ります。

信仰は、人は死んでも、自分だけは長生きするやうに、そして榮耀榮華が出来るやうにと願ふことではありません。そしてソレが決して一番の幸福でも、又羨まれることでもありません。人の爲めに身を捨て、人を助け、人を喜ばせることです。人を苦しませて自分が樂することなく、人の爲めに寧ろ自分が先立つて苦しむことです。

念佛は「念佛の爆彈」になつて、自分が破裂し、自分が千々に碎けて、味方を救ひ、味方を助けることです。自分の身が碎けることを怖れてゐたら、味方を救ふことは出来ません。自分が挺身隊となり、自分が白樺隊となつて、眞先きに友軍の爲めに死ぬ

ことです。斃れることです。

私達は「念佛」を、今迄は多くは學問的に研究してゐるだけであつた。或は口に申して「心に味つて」ゐるだけであつた。

ところが、今、アナタが生きた念佛の爆彈となつて、目の前で爆發して見せて下さつた。私達は驚いた。そして眞の活きた念佛とは、さういふ風に生きた念佛の火玉となつて燃えることだといふ、いゝ御手本を見せて下さつた。私達もアナタの後に續いて念佛の戦車となつて突貫します。

それを思へば、アノ法然上人が、晩年、圓熟とか圓熟とか、溫厚になられた一面に、アノ

「死刑に處せらるゝとも、コノ事云はずばあるべからず」

或は「念佛の興行、洛陽に年ひさし、邊鄙におもむきて田夫野人を勸めんこと、年來の本意なり」

と流刑をも恩寵として、身を挺して、念

佛弘通の聖戰に投入せられたのは、何といふ素晴らしい、決死的態度でせう、「念佛爆彈」でせう。

顔齡八十、臨滅の僅か前々日に、禿筆を呵して、「滅後の邪義を防がんがために」その一枚起請文をもつてせられた勇氣は、何といふ努力でせう。而かもアノ「もろこし我朝に、もろ／＼の智者だちの沙汰し申さるる觀念の念にも非ず……」と一絲亂れず詢詢として説示してゐられる態度は、何といふ冷朗な、透徹したお姿でせう、ドコに八十の老人にしてあれ程の大遺言の書ける人があるでせうか。又書き残さうとして死闘する勇者があるだらうか。法然上人にして初めて出来る最後までの健闘であります。「念佛健闘」であります。

此の祖師の芳躰を見、此の身を以て念佛一道の爲めに戦はれた祖訓に準して、今、君が身を念佛道の顯彰の爲めに殉ぜられたのを見て、私達は、轉た感慨無量、コノ

志を繼ぎ、コノ菩提行に躓いて、信仰戰線に就かうと致します。

朝起き一つするの、人に負けずに、眞先きになつて第一番に起きませう。そして庭一つ掃くのも、洗濯一つするの、出来るだけ人を樂させるよう、自分は進んで身を捧げて、縁の下の力持ち、水火の中へ自分を投じて、自ら苦しむことを涼しく感ずるほどになりませう。そして私達も立派に「名譽ある戦死者」になりませう。

法然上人は、我等に先立つて「第一の名譽の戦死者」であつた。

我等もアナタと共に、此の念佛道への戦死者、「日本道」への榮譽ある戦死者となつて、必ず身を立て、名を擧げませう。どうか我々の働きを見てゐて下さい。アナタの死を無駄にはしません。アナタの死を活かします。(了)

x

x

x

昭和三題話

私の叔母さんが汽船で旅行したことがあります。ところが、彼女は船室が解らなくなつて仕舞つたのです。そこで船員が叔母さんに、部屋番號を覚えてゐないかと訊ねたところ、叔母さんは、番號は覚えてゐないけれど、部屋を見れば解ります。私の部屋の窓からは燈臺が見えたから、と答へました。

或るギヤングの話

「お前、間違ひが起つた時にも笑つてゐられるかい？」
「お、笑つてゐられるともッ」
「それぢや、笑つてゐて呉れ。俺達ア、これからお前を殺つちまふと思つてゐるところなんだから。」

「僕の繼母のことを聞いたかい。彼女はね、或る病人に自分の血を輸血してやつたんだよ。」

「ふむ、随分情深い人だね。で、その病人は治つたのかい？」
「うんにや、お蔭で凍え死んぢやつたよ。」

信 仰 相 談

・・・中村辨康師擔當・・・

(本欄への質問はハガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと誌上匿名は可)

崇りと病氣災難

問

私は持病のある者です。少年時代に母が迷

つて或人に拜んで戴きました處、佛が崇つて居るので此病

氣があるのだとの事です。果して「崇り」と云ふ事が眞實にあ

るのですか。また崇つて佛が病を作るのですか御解答下

さい。(徳島A生)

答

死者の「たゝり」と云

ふものがあるでせう

か。貴君の仰しやる「佛」とは

「死者」の意味だと存じますが、

その「死者」が災をなすと云

ふことは未開人の間に信じら

れた宗教——と云つても原始的

な自然教ですが——で云つて居

ることであり、我が國でも古い

ところにはさう云ふ説話もある

にはありますが、それらは原始

時代の名残から誘導された傳説

であります。後世になつても

「果物語」とか「お岩稻荷」とか

云ふ話もありますけれども、い

づれも「怨霊」とか「崇り」と

かの説話が「暗示」になつて謂

ゆる「強迫観念」にかゝつた

ものです。其人に取つては「事

實」だつたのでせうが、第三者

から心理解剖をすれば「精神現

象」であります。

それも此方が悪い事をして居

れば居る程、其暗示に掛つて強

い「強迫観念」に迫られるの

です。たとへ理論的にそんな事はないと否定して居ても、遺傳されて居る原始的信仰の芽がのびて來て感情的に段々強迫され遂には信ぜざるを得なくなるものです。

然しこちらに悪い事をした覚えがない時は、さう大して問題

にはなりません。理論を知つて

居れば居る程一笑に附され葬

り去られてしまひますが、心理

現象の事を知らない人々は矢

張感情的に引つかゝつて氣に

するやうになり「病勢亢進」の

一原因ともなります。

私の地方などにも日蓮宗の

俗行者とか稻荷講社の女行

者などが「御前の病氣は或る

佛の祟りだ。御前の一族中には

祭られて居ない人がある筈だ。

それは今から幾代前の人だ。だ

から其人を怒るに供養してやり

なさへ」などと出鱈目の事を教

へて居るのがあります。何處の家でも古い人のは其儘になつて居るのがありますし、また「一族の中に」と廣範圍の事を云はれますと、遠い親類中には「行衛不明」になつて居るとか「出戻り」で厄介になつて居る死者などあつたりして「それが祟りをしたのか」と思つて大騒ぎしてお祭りをすることにもなるのです。それも亦一つの精神療養になるものですから、滿更「無効だ」と云ふ斷定も下されませんけれども、實は弱い人間感情を捉へた事で、さう云ふ事を云ひふらす「行者」などは寧ろ「惡魔の使者」と云つてもよいではないでせうか。

佛教では「因果」を説きます

が、むしろ「因果」よりも「因縁」に重點を置いて居ます。つまり「小因果」よりも「大因果」に本當の因果があるとして居り

信 仰 相 談

ます。即ち堅固の關係ばかりの小さな「因果」は兎もすれば「運命論者」に落入り易いのですが、廣く横の關係をも顧みる「縁起」の事實に着目する時、積極的に自分の生活及び周囲の諸條件を整理して「受く可き禍ひを轉じて福となし得る」道德的な氣持を湧き立たせます。それが本當なのです。つまり人々を消極的な氣持に追ひ落すやうな教へは本當の宗教ではありません。積極的に奮ひ立たすものでなくては「救ひ」と云ふ重大な特性まで無くなつて仕舞ひます。

悪い事をしたと云ふ自覺のある人は兎に角としても、さうした自覺のない無垢な少年が或る信心者に見て貰つて「佛(先祖)の祟りだ」と云はれた事は實に氣の毒な至りです。よし一步を譲つて先祖の中の誰か「祟り」をなしたとしても、其他の先亡の方々が黙つて見て居る筈がありません。若し假りに黙つて見て居るのであるとすればそれは「共同戦線」を張つて居るに均しいものです。それなら子孫の繁榮を思ふ先祖としての意味もなくなつて居ます。そんな馬鹿氣た事はない筈です。また「無」から「有」を生ずることは出来ませんから、祟る原因も多いのに其人に丈け無謀にも「病」を作つておつかぶせる事が出来る筈はありません。

況して佛教では「惡魔」を精神的に見て居ります。即ち自分の身體から來る害惡を「五陰魔」と云ひ、精神的な慾望を「煩惱魔」と云ふやうな具合です。そんな「祟り」などと云ふ原始的な幼稚な宗教に迷はずに、一切の惡魔を降伏させる如來大願業力に頼んで、もつと明るい氣

持ちになり、信仰生活を喜ぶやうになつて下さい。御願ひします。

迷信と正信

問

迷信と正信との區別に關してその定義とか意義とかを御知らせ下さい。

答

(下谷、吉野武雄)
迷信と正信との比較が解ればおよろしいので、せうから、簡単に申上げて見ます。

まづ大體左の五つに就て御判断下さつたらよいと存じます。
一、社會國家の進展に貢獻し得るか何うか。
信仰に依て其人が正義に立脚し、進んで正義を敢然として實行する場合、事實に於て社會なり國家なりが正しく進展して行く可能が、十人が十人ながら是認し得らるるも

のなら、先づ正信と云つてよいでせう。
二、信仰の心が神佛におもねつて居るか何うか。
神佛の御機嫌を損じないやうに、始終お供へ物をしたりお金を上げたりすれば、自然神様も自分の方へ好意を寄せるであらうと考へて謂ゆるおべつかを使ふのを獎勵して居るやうな信仰ならば勿論「迷信」です。
三、信ずる者のみに特別に好意を示す神佛か否か。
信ずる者には「病氣を癒してやつたりお金を儲けさせて呉れたり」するやうな依怙品負の神佛ならばこれまた「迷

信 仰 相 談

「信」です。たとへば「聖天様を御祭りすると七代分の財寶が集るなど」と云ふ類のもので

四、信じない者に罰を與へるか何うか。

信じないからと云つて病氣とか災難とかの罰を與へるやうなものならば悪魔であつて

本當の神佛ではありません。例へば信ずるなら天國へやるが、信じなければ地獄の火の

中に追ひ落とすと云ふやうなものなら、御機嫌買ひの人間以下

二 障の雲翳

煩惱障と所知障と

無始來の雲の翳

深く魅りて六ツ辻に

輪廻の旅路を急ぎ行く

無明業のみわりなしや

竹 中 如 月

煩惱障と所知障と

生死無終の雲の翳

霽るゝ菩提の高峰に

六根清淨・登攀りゆく

光明界ぞたふとけれ

らを無視するものではありません。むしろ信仰に依つて道徳が守られ經濟が擴充され

理論がより一層高められるものですから、若し單にそれらが無視されて、却て不倫行爲

が是認され、働かないのにお金がもうかり、得手勝手

の理論がデッチ上げられて居るやうな教へならば、表面如何に

カムフラージュされてうまく飾られて居ても、何時かは暴

露されませう。そんなのは云ふまでもなく迷信です。

要するに信仰に依て人格が高められ段々立派な人になれるやうな信仰ならば「正信」です

が、何年たつても「我利々々亡者」のように、個人主義であり

欲ばかり深く、社會國家への何の貢獻もしないなら、謂ゆる

「迷へる者」です。いくら信仰があると云つてもそれは

「迷信」である譯です。之は簡人的にも團體的にも批判されねばならぬことです。

宗教の「定義」など舉げますと色々ありますが、それ程の必要も御座いますまいから、大體

之で御判断願ひます。

但し之は迷信と正信との比較で、まだ正しい信仰の姿に就いては申して居りませんが、そ

れはまた機會を得て申し上げます。然し要を取つて云へば「本當に覺め得る」ものが「正信」

です。だから「自己改造」に精進しようとして居る人は正信

の保持者です。淨土教の信仰は如來に依て段々目がさめて行くのですから「正信」である譯で

す。

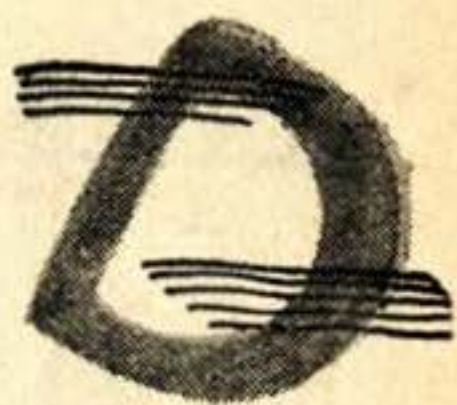
……

……

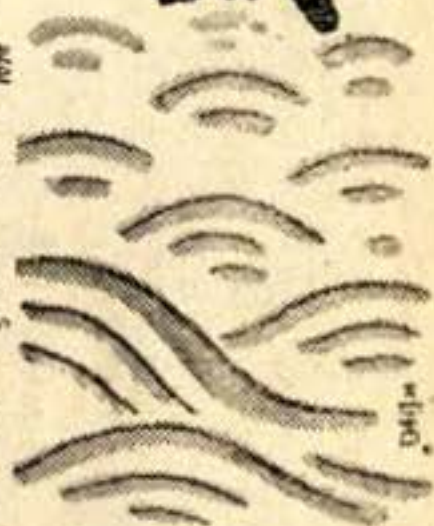
……

……

……



佛教常識



煩惱とは？ (一)

「煩惱」は「煩ひ惱み」で、私達にハッキリした理想が確立して居ない爲に色々間違つた「考へ」を以て行動するところから、自然に色々な苦惱や煩悶を起さざるを得なくなるので、其「煩悶苦惱」の源たる「惑ひ」を指して煩惱と云つたのです。即ち結果としての状態を其まゝ「原因」の名に奪つて名付けたものです。だから「惑」とも申します。心が「迷惑」して曲つた方へ行くからです。さうすると結果として「煩悶苦惱」しなければならず、それが爲めいよく／＼ますます／＼心が歪んで行き愈々益々「苦惱」が増しますので「垢」とも「結」とも「縛」とも「繋」とも「蓋」とも「燒害」とも乃至「愛欲」とも申し其他色々な異名がついて居るのであります。

で此の元は何だと申しますと「生きること」が分らぬ「即ち何の爲めに生きねばならぬのか、何うするのが本當の生き方なのかサツパリ分らないからであります。此無自覺状態を「無明」と呼んで居ます。

「無明」とは「無覺」であります。此の反對の状態を「覺」ととりと云ふのですが、無明は「我」と云ふものの本質をハッキリ「覺」らないからです。そして一切の現象を「存在」としてのみ見て居て「縁起」としての流動體生命體と見ることが出来ないからです。

「縁起」とは「一切の現象は諸條件の集つた作用に依つて現はれたものであり、隨て其持ちのものであり、常に變化して行くものである」と云ふ哲理です。これが自分の上に現はれる色々な日常問題は勿論自分の心までも、そして「自分」其ものまでも理解でばか

りでなしに感情的にも縁起としてハッキリ感じ且つ觀じて行くのですが、かくして始めて私達の生きる道がバツと光りをさした様に明るくなり、人生の理想が明瞭になつて來ると云はれます。

然るにそれがハッキリ分らないので、何うしても「我」に執着を感じ「我身を愛する心」が強くなり、隨つて夫から色々な間違つた「考へ」が起き謂ゆる「惑」になつて行動が歪められて行くのです。

この「無明」が元であります。それから認識の「惑」と感情的な「惑」とが派生して來ます。此の認識的なものを「見惑」と云ひ、感情的なものを「思惑」と名付けます。之の關係を最もよく説明するものが謂ゆる。

「十二因縁」です。十二因縁のことは何れ機會を得て委しく申し上げ度いと存じますが、大體を申しますと

- 一、無明（自分及び世界が分らないこと）
- 二、行（持續、分析、綜合、進展等の作用）
- 三、識（分別、認識）

四、名色（對立觀念）主觀と客觀と
五、六入（五官及び意識の機關並に其感覺意識外形）

六、觸（身心の機關と外部との接觸）

七、受（感覺——純粹直觀）

八、愛欲（惑又は煩惱）無明、行に依つて起る妄見。

九、取（執着）

一〇、有（存在觀念）

一一、生（生存——正しからざる生活）

一二、老病死（人生苦の代表）

無明からそれを基礎とする作用が起り其作用から更に識が起りますが、それがまた元になつて名色六入觸受の順序を繰返し經驗する爲に、愛欲と云ふ「惑」を形造り、取と云ふ執着や有と云ふ存在觀念などが生じて自然に生活が歪められるのだと云ひます。即ち「無明行識」が愛欲と云ふ「惑」を生ずるのですから、之を反對に「明行識」に變化さすれば「覺」になる譯で「迷悟」の差は「無明行」か「明行」かの差に外ならないのです。

然らば「無明」を「明」に變化さすには何うすればよいかと云ふに、大體「無明行」から「識」が先づ起り、其識の上に色々な經驗をしたのちに「愛欲」と云ふ感情的な「惑」が作り上げられる關係をたどると、思惑よりも見惑を最初に訂正して行かねばならぬことに氣が付くでせう。

この「見惑」には五利使五鈍使とか八十八使とか百十二使とか色々ありますが、其代表的なものとするべきものは

一、我身見（我及び我身に執着する心）

二、邊執見（一方付けて執着する心、苦樂、有無等）

三、邪見（邪なる歪曲された心）

四、見取見（先入主の心）

五、戒禁取見（カブイなどの如き迷信に執着する心）

の「五利使」五つのするどい心の使者で、之が起つたのは無明に依る「我見」がある爲に苦とか樂とかの行爲の上に於ける考へとか、有るとか無いとか云ふ所有に關する考へとか、又は右とか左とか云ふ思想的な考へとかの一方付けた「邊見」が生じ、それに依つて曲つた「邪見」が起り、初めに思ひ込んだら頑固に夫を固執する「先入主見」が起り、隨つて「迷信」即ち「戒禁取見」に入つて正しい考へがなくなつて來るので、先づ正しい宗教に依つて「迷信」を破り、其迷信の基礎である「先入主」を破れば大體「緣起の理」が體氣乍らも判つて來て「邪見」がなくなり「邊見」が破られ「我」を張ることのい

けないことにも氣が付いて來ます。然し此の「我見」と云ふものは理窟では判つても、すつかりこびり付いて居て思想的にも貪瞋痴慢疑の五鈍使を派生しますが、それが更に「思惑」と云ふものを感情的に作り上げて來るので、理論と實際とが一致せず、始終「我」がかま首を持ち上げて、容易に之を退治することが出來ないのであります。

だから猛訓練に依て常に「思惑」を訂正して行くやうに心掛けねばならない譯です。

鑽仰運動ニユース

“浄土”を中心

『阪神浄土』生る！

在家の方々の手で——

此度在俗の人々を中心として「浄土」本位の「阪神浄土」が生れた、即ち福永文三郎、馬殿福松、辻三省の三氏が發起人となつて、日本の家庭の中心である御佛壇の中に、ある佛教精神を現代に生かさんと、「浄土」中心の清い集りが作られた。事務所は兵庫縣尼崎市東園町辻三省方において、目下「阪神浄土」の會員即ち同信を求めてゐるが、行事としては毎月一回、楽しい家族同信の集りを開き、よき人のよき言葉を聞き、よき行を習ひ、時に大空を仰ぎ、縁を慕ひ、或は靈場の靈氣に打たれ、古跡に先覺の功を讃えて、家族同信の魂の清化を期してゐる。

尙十一月の集ひは去る四日同縣の若屋の福永文三郎氏宅で開き、晝食を共にして森脇氏の講話を聞いたが、落着いた敬虔な集りであつた。會費は同信一家族につき年額金三圓で、毎月「浄土」が届けられる事になつてゐる。在俗の方々が自發的に發企せられた處に意義があるが、伸び行く「浄土」の雄々しい姿ではないか。「阪神浄土」の發展を切に祈る。

出征兵士に

浄土を贈る

滋賀縣甲賀郡三雲村の盛福寺住職村瀬圓脩師はかねてから出征

兵を何とかして慰めたいと考へられてゐたが、「浄土」こそ最も適した慰問品であると確信せられ同村から出征した將士八十餘名に一人残らず「浄土」を贈つて心からの慰問をせられたが、出征兵は戦地での心の糧が出来たと非常に感激してゐる。又村一同でも同師の時機に適した行ひに稱讃の聲を送つて喜んでゐる。

銃後の心を鍊る

傳通會館の講義

先般來より本會と布教講習所と傳通會館との共同主催の下に行つて來た講演會は、時局の進展につれてその重大さを考へ秋を迎へると共に陣容を刷新して大童の活躍をしてゐるが、去る十一月九日は佐藤賢順主事が特別に出講して熱辯を揮つた。

貞恭支部の例會

傷病兵慰問に續いて連續的に座談會や例回等を開いてゐる貞恭支部では十一月十六日には午後一時より明照會館で中村辨康先生に「北支に拾ふ」を聞いた。

會員の聲

▼只今お寺より十一月號を受取り一通り目を通しました。これから反復味讀させて頂くつもりですが、七月號あたりの事を思へばグツト感じのよいもので、平易で實に嬉しく存じます。實は「浄土」の名物と申しますかそれある爲にも、あると云ふか、信仰相談欄(尤も變な質問もありますが)は我々の胸には一番こたへ易くよく判りますし、始めての人や餘り佛教に馴染のない人に奨めて讀ますにも大變便利のよい欄であります。今月號の「正統か異流か」の質問に對する中村先生のお答へに「これらは大概にして許してくれ」云々とありそのお氣持は判るのですが支那の宣傳には日本及び日本びいきの者は困つてゐるやうに、眞宗とのかうした問題は毎月でも私は載せてあつてよいと思ふのです。貴社の方は同一人でも讀者は次々に新しく代つて行きます。念佛の六字の解説の如きも時々にはくり返し書かれてよいのだと思ひます。前の號に出てゐるものをその儘載せて、(何年何月號の何々の答記事)と最後へ括弧して轉載されてよいのですからお願ひ申し上げます(廣島・上原良人)。

▼「浄土」十一月號の「佛教常識」は至極必要につき永く引續いて御掲載方をよろしく願ひ上げます。佛教では數に就ての熟字が多數あつて(三界、三十三天、六道、三身の如き字句)何分共判りにくく困ります故よろしく願ひます(兵庫・秋田鐵之助)。

▼眞野正順先生の御病氣御見舞申上げます。一日も早く御全快の程御祈り申上げます(神戸市・坂井永一郎)。

戦線に輝く「浄土」

戦場に光を

與へる「浄土」

〇〇部隊 鈴木 義導

十月も餘すところ今日一日となりました。去る二十八日出征以來始めて内地よりの慰問品を頂き喜び勇んで開いて見ましたら、貴浄土宗よりの御慰問に接し我知らず稱名口に浮び歡喜の思を致しました。「浄土」の御本を拜見しては陣中荒れはてた心中に慈愛の心のふりかゝり来るを感じ、眞闇に光明を得たるが如く、雪中の薪火に接した如く、冷えきつた心の氷の消けて念佛の温き水の流れ出づるを禁じ得ませんでした。大悲無倦常照我身の我が身を喜び、何を致すもこれ皆御恩報謝なりと一心に御奉公致してゐます。御蔭様にて皇軍の勇士は皆々大變元氣に働いてゐます。誠に亂筆にて陣中便箋とでもなく自作の粗封筒、悪しからず御許し下さい。先は粗書ながら御禮申上げます。

元氣をつける

最適の「浄土」

〇〇〇〇隊 山内 七三

吹き来る風も何時しか秋の涼風となりました。此度は貴浄土宗より出されし慰問袋が幸にも私の手に届けられ、これもひとへに御佛の御力なりと感激してゐます。又陣中に於て心を靜かにして元氣をつけるには最適の教への本「浄土」までもお送り下され、暇を見ては

楽しく拜見してゐます。私の實家は信仰家揃ひで、特に母などは秋の取入れの忙しい時でも二時には起きて、私の爲に、無事國の爲に盡せるようにと御佛におすがり申してゐるとの事で嬉しさに泣いてゐます。私も村の御住職から頂いた御守護を肌身はなさず身につけて數知れぬ戦闘に参加し、最前線を驅馳してゐますが、御佛の御加護か未だ一彈も受けず、感謝のうちに戦つてゐます。先は取敢へず御禮申上げます。

干戈の下に

拜讀する「浄土」

〇〇〇〇隊 佐田 明

私は先日御心盡しの御慰問袋を頂戴致しました者の一人でございます。赤心の數々の御品有難く拜受精神の糧としての「浄土」干戈の寸假に戦座の憩ひに

味はひつゝ拜讀してゐます。時局紛糾の折柄皇國日本の爲に東奔西走暇なき皆様の尊き御姿が目に見えます。大君の爲にこそ尊き銃後の御赤誠の爲にこそ我々は笑つて一死報國の實を盡す事が出来るのです。向寒の折柄愈々御健勝にて御健闘をお祈り申上げます。先は有難く御禮申上げます。

心の糧「浄土」

〇〇部隊 福間 覺雄

時下秋冷の候となりました。浄土宗管長様には愈々御壯健の事と拜察申上げます。下つて私もお蔭様にて何の變りもなく戦ひに従事致し國家に御奉公申上げてゐます。さて昨日は赤誠こもる慰問の品々を御送り下され有難うございました。御守様は大切にして御守袋に入れ肌身に付けました。品物は战友と別け合つて頂きました。殊に支那では讀物としては入手しがたく新聞を地方より送り來たるを見ては喜んでゐる有様です。昨日の慰問袋の中に入つてゐた「浄土」七月號は特に喜んで讀みました。戦闘は生死の一大事ですから宗教の讀物は特に稱讃して讀みました。(中略)種々と失禮な事を書きました。お許し下さい。先は御禮旁々御自愛專一の程をお祈り申上げます。

こゝに掲げた手紙は何れも宗務所より送つた慰問袋に對する原地からの生々しい硝煙漂ふ御禮狀である。

俳壇

大田 耳動子



朝鮮 蟹江 八年坊

十二月早やまろまれる雀たち

評 十二月が来たと思つたら、雀達はもう着ぶくれて丸くなつてゐると驚異の眼をみはり、更に其れに依つて、さうだ、十二月が憶かに来たのだと感心してゐる様子が眼に見えるやうだ。十二月を上五に置いたのが此の場合非常に強く感ぜられる。

大阪 青山 茂

落葉踏み山の蒼穹仰ぎけり

評 十一月頃のことか。紅葉を探ねてか。一霜降りたらしい後の落葉を踏み乍ら、匂ふが如く滴るが如く晴つた碧一色の山上を心ゆくまで仰いだと云ふのである。大きく深呼吸吸もした事であらう。何と云ふ清々しさであらう。

小倉 増谷 やすを

十夜僧衆生に向ひ咳一つ

評 句意は十夜僧が、集まつてゐる善男善女に向つて、おほんと大きく一つ咳拂をしたと云ふ極めて簡單なものである。が何か、それだけでは済まされないうものがあると思ふ。そこを良しとする。解釋しきれぬやうでは内容が浅い。此の咳拂から威を感じ、ユーモアを感じ、禪を感じる。

北海道 竹岡 昇全

稲を刈る鎌ちかくと陽を弾く

朝鮮 蟹江 廣吉

蠶干や秘佛の面もかくはしく

禮文島 長尾 月松

石垣の家高々と柿の秋

姫路 内海 眞瑞

藻の如く川原の草や秋出水

福島 安藤 四郎

大時計夜霧の街にひびきけり

本郷 新田 眞砂

夜半の秋雨漏る音の聞えくる

新宮 奥村 映水

稻妻や紀の松島はまのあたり

山口 長岡 見智

何うしても秋の蚊我に勝たんとす

津久見 石堂 柑山生

スパイクの跡付く野路や秋の晴

滋賀 森田 孝春

竹藪の波あらけなき野分かな

長野 長田 實義

子を思ふ臉が熱き夜長かな

青森 高松 秋水

街の音野菊に暮るゝ丘にあり

東京 鈴木 白舟

縁の蠶動かず雨も秋となる

同 龍澤 全翁

秋の雲富士を繞りて昏れにけり

飯田 古川 八重子

落葉々々に陽の色見せて秋晴るゝ

大阪 橋本 花汀

遠山の澄む月明を蠶の聲

神奈川 眞島 梅作

山道にすてある茸秋深し

東京 三野 輪江雪

長き夜の灯に遊び老いし蠅

熊本 稻田

運動會見てゐて親の心かな

青森 柴田 長

山川に施餓鬼の棚や鬼薊

東京 鈴木 白舟

風晴るゝ晝を散る葉に佇しめり

大阪 六尾 竹雄

秋雨に向ひ波止場の小舟かな

福田 護山

冬の木にさゝやく小鳥冬日和

大和 奥田 秋郊

篠の峯とび行きけるや秋燕

東京 飯倉 八郎

熟れ柿のたわゝに雨の明るけれ

青森 渡邊 茂

初茸はリユツクの底につぶれりし

大阪 六尾 竹雄

娘客清らに秋の渡し舟

青森 玉熊 晋字

秋餅の伯父の年々耳遠し

宮城 大湯 富雄

かまきりの雌いま雄を喰ふところ

東京 安武 千九

落葉散らす風に木の實を拾ふかな

同 松本 光司

水霜に耐へて色濃き赤まんま

岩手 相澤 祐子

パチンコの的にしてをり赤い柿

宮城 千田 瘦犬

五體皆聴覺となり霧の夜を

東京 芝 寧々

實柘榴の相打つて勁し初嵐

青森 鎌田 鳥崎

蠟燭に顔を集めて颯風來

法 語
解 説

戦 陣 に 臨 む と き

中 村 辨 康

機 人 が ら

時 處 諸 縁 時 場 所 や 其 他 色 々 の 機 會

本 願 に 乗 じ 救 は れ る こ と

來 迎 如 來 の 迎 ひ

甘 糟 太 郎 忠 綱 へ の 法 語

彌陀の本願は機の善惡を云はず、行の多少を論ぜず、身の淨不淨を簡ばず、時處諸縁を嫌はざれば、死の縁に依る可らず、罪人は罪人乍ら名號を唱へて往生す。之れ本願の不思議なり。弓箭の家に生れたる人、たとひ軍陣に戦ひ命を失ふとも、念佛せば本願に乘じ來迎に預らんとゆめゆめ疑ふべからず。

(勅 修 御 傳 卷 二 十 六)

甘糟太郎忠綱は、武藏國七黨の内の猪俣黨に屬する武士であつた。七黨とは兒玉黨、丹黨、猪俣黨、横山黨、私

黨、紀黨、清黨の七つである。

「謂ゆる關左の力、能く天下を制するものは此七黨なり、兵力尤も強し」

と云はれる位の荒武者揃ひであつた。

其中の猪俣黨は兒玉郡猪俣村(今の太田村)に住んだ猪俣兵衛尉時範を祖とするもので、代々猪俣介と號し一族は、猪俣、荏原、河勾、太田、人見、甘糟、藤田、山崎、岡部、内島、蓮沼、男衾、横瀬、野部、木里、瓦園、無動寺、友庄、木部、萩野など云ふのであつて、餘り廣くはないが相當強力な團體だつた。

甘糟は丹黨の一族古郡氏の舊地と想像せらるゝ古郡の北に界し、今の松久村の一字で、東鑑に見える「甘糟野次郎廣忠」の領地である。

獨歩獅子の如き猛獸のこと衆徒學衆の方の衆徒忽緒ないがし
 八王子山王七社の内、二ノ宮の上の山腹にある三ノ宮と相並んで鎮坐す。此山を一に金子山とも云ふ願念願心に同じ

「太郎忠綱」は此の「野次郎廣忠」の子であらうと「勅修御傳翼賛」に云つて居るが、七黨系圖には「野次郎廣高の子、太郎忠經、法然上人の弟子となり、治承二年八月、山門堂衆合戦に討死す」とある。綱と經との相違があるからハツキリはしないけれども、推定だけは出来るやうである。

「東鑑」には

「建久三年八月一日學生城廓を大納言岡井びに南谷の走井坊に構へ堂衆を追却す。同六日に堂衆三箇の庄官等の勇士を引率して山に上つて責め戦へり。件の城廓の兩方に傷死の者擧げて數ふべからず。同じき十月十日に堂衆等八王子山を以て城廓として群居するの間、同じき十五日官軍を差遣ふて之を責めらるゝに依て堂衆退散す。官軍三百人討取られぬ。葛西四郎重元、豊島太郎朝綱、佐々木太郎重綱已下討たせらるゝなど出て居る。

勅修御傳に依ると

「然るに山門の堂衆等、獨歩のあまり衆徒を忽緒し日吉八王子の社壇を城廓として悪行をたくみしかば、武士をさし遣して攻められし時、忠綱勅に應じて、建久三年十一月十五日、かの城廓に向ふに、まづ上人に參じて申すやう

我等如き罪人なりとも本願を頼んで念佛せば往生疑ひなき旨、日來御教へを承りて深く其旨を存ずと雖も、それは病の床に臥してのどかに臨終せん時の事なり。武士の習ひ進退心にまかせざれば、山門の堂衆を追討の爲に勅命に依りて只今八王子の城へ向ひ侍べり。忠綱武勇の家に生れて弓箭の道に携る。進みては父祖の遺塵を失ず、退きては子孫の後榮を残さんが爲に敵を防ぎ身を捨てば、悪心熾盛にして、願念發起し難し。若し今生の假なるいはれを思ひ、往生の圖むべき理りを忘れずば、かへりて敵の爲にとり、こにせられん。長く臆病の名を止めて忽ちに譜代の跡を失ひつべし。何れを捨て何れを取るべしと云ふこと愚意辨へがたし。弓箭の家業をも捨てず、往生の素意をも遂ぐる道侍らば願くば御一言を承らん。と申しければ、上人仰せらるゝやう」

とあつて前掲の法語が續くのであるが、これには「建久三年十一月十五日」とあり、「東鑑」には「建久三年十月十五日」とあり、前の「七黨系圖」には「治承二年八月」とあるので、此處にも年月の上に喰違ひがある。

だが私達には今の處そんな穿鑿はどうでもよい事であ

生 學匠 學者、學
童部 家來、郎
黨 中間法師 中年
坊主
大衆 學衆達

る。唯だ此の甘糟太郎の氣持とそれに對する法然上人のお話しの意味が判ればよいのである。

甘糟太郎としては信仰と云ふものと戦争との調和が取れず「戦争は罪惡である」と見て居たからであるが、それは重に「戦争は人を殺すのが目的だから」と云ふ意味にしか見て居なかつたからではないかと思ふ。

然し果して「戦争の目的は人を殺すにある」のであらうか。此の山門の争ひの場合に就て考へると、「堂衆」と云ふものは「學衆」の家來であつた。即ち公卿公達に使へて居た武士達が、主人の出家に従つて共に出家し堂衆即ち山武士として入道姿をして居る譯で、それが嫌やなら失業して浮浪の野武士になるか、さもなければ別の主人を探し求めるより外に手段はなかつたのである。それが段々時代を過ぎて諸國の喰ひつめ者も之に参加して數を増して來たところへ、時代的にも武士勃興の氣運が擡頭して、中央の政治機關である公家に對する「下剋上」の氣分が濃厚になり、地方の豪族が追々に勢力を得て、一部の特權階級に從はなくなつた謂ゆる武家時代が來た譯であるから、山門に於ける學衆と堂衆との間にも之の影響を受けて遂に對立状態となり、伸いて戦争にまで展開して行つたのであつた。

「源平盛衰記」の九には

「堂衆と申すは學匠の召し仕ひける童部の法師に成りたるや、若しは、中間法師などにて有りけるが、金剛壽院の座主覺尋僧正の御治山の時より三塔に結番して「夏衆」と號して佛に華奉りし輩なり。近來行人とて山門の威に募り切物、寄物責めはたり、出擧げ借上げ入り散して徳付公名付けなんどして、以ての外に過分に成り、大衆をも事ともせず、師主の命に背き、かやうに度々の合戦に打ち勝ちていと我慢の鋒をぞ研きける」

と云つて居るが、これだけの言葉でも想像が付くやうに、宗教的な氣持で佛に仕へるとか、若しくは佛教の學問や修行をするのではなく、唯だ堂内の掃除とか飾りとか守護とかして居たのに過ぎないのに、町に下つて寄附を強要したり「出擧」と云ふ爲替を猫ばゞにしたり其他色々な事をして贅澤する爲の資財を宗教の名に依つてかすめるばかりでなく、長上の命令にも従はず、我儘勝手な振舞をなし常に師主に反抗をし續けて居たので、其暴戾を膺懲する爲めに勅命に依つて出動したのであるから、其暴戾を反省すれば敢へてその人達を戦ひに依つて殺す必要もないのである。「出征兵」としての箇々の人達は敵を亡ぼすことにあつて

も、其戦争の大目的は反省を促すものでしかないのだから戦争其ものを小目的としての殺人丈を見て罪惡とする理由はない筈である。ところが其頃は何事でも形式主義にあつたから、戒と云ふことも其第一の「不殺生戒」は「生物の命を取ることは罪である」として生物を殺さないのを其戒の中心としてのみ考へて居たので、人を殺すことは大きな罪であり隨て如何に戦争とは云へ宗教的には「人を殺す」爲の刀を振り廻すなんていけないことではないかと考へざるを得なかつたのであらう。

然し夫れだと結局「臆病者」と云ふそしりを受けなければならぬことになるし、隨て所領も沒收されてしまふであらうから、さしづめ妻子を路頭に迷はせなくてはならぬ譯で、名譽の上にも經濟の上にも行詰りが生じて来る。即ち「生活」と「信仰」とが喰ひ違つて「何うやるのがよいのか」迷はざるを得なかつたのも無理はないのである。

甘糟太郎には小太郎 小次郎と云ふ息子があつたらしいことは東鑑に其名が見えて居るので判るのである。武藏國猪俣黨の武士の名に於ても、若し自分が不覺の名を取れば、社會的に甘糟の家は滅亡しなければならぬ。と云つて「永遠の生命」の爲には結局さうした名譽とか所領とかは

小問題でしかないやうにも思はれる。

理想に生く可きか。現實に従ふべきか。なまじ宗教をききかちつた丈に惱みは大きかつたに相違ない。

然し法然上人の解答は極めて簡潔であり明快であつたのである。しかも一切の理論を其中に介入せしめない程に、善惡觀念の外にスボツと抜け出て、想はず襟を正さしめるやうな崇高な感じをさへ與へて居るのである。

人間の善惡。

修行の多少。

罪惡の有無。

時處の良否。

臨終の條件。

さう云つた問題は達觀すれば問題にはならない。唯だ「念佛」と云ふ大きな光に依つて一切が解消されると云ふ何時もながらの御言葉ではあるが、理窟を抜きにして、

「之れ本願の不思議なり」

と云はれた一言は實に千鈞の重みがあるかと思ふ。

是れから戦場に行く人である。

そして戦死を覺悟して居る人である。

戦争に就いての理論だとか、殺生戒に就ての正しい解釋

權現ごんげん||かりに現あら
 はれた神かみ
 本地ちのち||本地垂迹ちのちすゑ
 の説せつ、八王子權現やちうじごんげん
 現は觀音くわんおんの垂迹すゑ
 左脇さわき||阿彌陀佛あみだぶつ
 の左脇さわきにある
 のが觀音くわんおん
 重代ちゅうだい||代々重かさ
 ねて豪ごうの者ものであ
 つたから
 行道ぎやうだう||經行きやうぎやうと
 も云ふ經きやうを讀よ
 み乍はら歩くこと

だとか、さうした問題も取り上げて話せば話せられない事もないが、そんなことを百萬陀羅ひやくまんたらかならべるよりも

「たとひ軍陣に臨んで或は人を殺し或は我が命を失ふとも、念佛ねんぶつにあらば一切の問題は太陽の前の螢火えいひの如きもので問題にはならない。之れ本願大願業力の不思議である」

と云つたので、さすがに太郎忠綱をして安心して戦ひ抜き安心して戦死までした程の働きをさせたのである。

果して太郎忠綱は奮闘の末戦死したのであつた。

九卷傳には

「上人の御袈裟ぎやさを給ふて鎧の下にかけ、やがてそれより八王子の城へ向ひけるに、彼社は東向なれば寄手は西向によせけるに「八王子權現の本地は彌陀左脇の觀世音なり。幸に我西方に向へり。往生の便を得たるものか。

權現捨て給ふな」と祈請して命を捨て、戦ひけるところに、堂衆の中に一房中より十八人出でたりける武者、みな手柄ありける豪の者なりけるが「甘糟あまぞう太郎と云ふ重代の豪の武者の向ふなるに、同じくは其仁を敵にうけて高名深くも此時現はすべし」と支度しけるが、未だ甘糟を見知らざる間、名乗らせて知らんとの謀にて「我と思

はん敵は名乗りて進め」と云ひて、十八人の者共しころを井べて木戸口より進み出でけるに、甘糟は折しも木戸口近く攻め寄せたりけるが、取りも敢ず「武藏國の住人甘糟太郎忠綱といふ重代の豪の武者なり。手にかけて名をあげよ」と名のりければ、十八人の者共は各支度したる事なれば、心を同じくして戦ひけるに、十二人は甘糟が手にかゝりて討れぬ。甘糟は残り六人の手にかゝりてけるが、深手をおひける上、太刀は半ばより打ち折れたり。今はかくと覺えければ、太刀を捨て甲をぬぎて掌を合せ一心に彌陀を念じ高聲念佛して敵の爲に命をまかせけるに、紫雲たなびき音聲聞えければ、遠近の人あやしまずと云ふ事なし。上人は縁に行道しておはしけるに東坂に當つて紫雲の見えければ「此靈雲こそあやしけれ。一定、甘糟が往生しつると覺ゆる」とぞ仰せられける。國に留めおく妻子の許へ此由を告げ遣しけるに、臨終の夜、妻の夢に往生したる由を示しければ、驚きて使をのぼせけるに、京より下りける使に行きあひて、戰場にての往生の有様、田舎にての夢の告、互ひに不思議なりし事を談じけり。本願の不思議と云ひ乍ら、合戦の場に靈瑞を現じ眼前の往生を遂げる事、眞に希代の奇特な

毒鼓どくこ太鼓たいこに毒どくをぬつて打つと其の毒が敵の方へ飛んで行つて多くの人を殺すと云ふ印度の武器である。之を折伏の逆縁ぎやくえんに譬たとへへて釋尊しやくそんが說法したことがあるから、今逆縁と云ふ意味に用ひたのである。

りしかば、打手六人の輩「如何なれば甘糟あまぢは在俗の身ながら深く本願ほんがんを信じて合戦あせんの場に往生おしょうを遂げぬぞ。如何なる我等なれば頭かしらを刺り衣えを染め乍はなら俗の身にも及ばざるらん」と改悔かいかいをなし心を發して、且つは甘糟の後世ごせをも弔ひ且つは罪障ざいしやう懺悔ざんかいの爲にとて本坊ほんぽうへ歸らず、やがてそれより出で諸國しよこくを修行しゆぎやうして靈佛りやうぶつ靈社りやうしゃに歩あみ運びけるが、武藏國むさうこくを通りける時、或所あるところにて供養くやうを望みけるに「法師ほふしは心憂きものと思ふ事あり」と云ひて四壁しへきの内へも入れざりければ、其故そのゆゑを問ふに「之は山門さんもんの堂衆だうしゆの爲に命いのちを失へる甘糟あまぢが遺跡いせきなり。法師に命を奪はれたる故に法師は皆なうとましき也」と答へければ「我等こそ其人そのひとを失ひし敵なれ。我等一列いつれつの豪の武者十八人侍りしに十二人は甘糟にうたれき。甘糟をば残り六人の手にかけしに忽ちたちまちに奇特きせきを顯はし眼前がんぜんに往生おしょうを遂げられしを見て發心はつしんせり。かゝる往生人を手につけるを毒鼓の縁として後生ごしやうを助かり、又たかの甘糟が菩提ぼだいをも弔ひ奉らんが爲に六人共に發心して修行し侍りける」由よしを申しける時「憂きも中々なかなかたみなりけり」とて最後に近づけるをなつかしき事に忍びて、中陰ちゆういんの間、留め置きて諸共に孝養きやうやうをぞ營みける」

と云つて居るが、此中で「俗人が立派な信仰を得て居るのに自分達出家しゆけがあべこべに信仰なき生活をして居た」事に氣が付いて、改めて山を下つて修行に出たと云ふ一段は、出家佛教しゆけぶつこくに對する在家佛教ざいけぶつこくからの迫撃砲はくげきぱう一發と云ふところであらう。

此話は一面に戦争心理と信仰心理との衝突きつごつに關して、一般道徳や一般宗教の矛盾もつとんを、淨土教では理窟りこくを抜きにして却て死に直面する時、ともすれば怯懦けつにやうにならうとする氣持を一掃し、寧ろ進んで敢然かんぜんとして奮戦ふせんし得る勇氣を興へるものであること、及び他の一面に於て經濟や名譽に對する世間的な氣持と宗教の信仰とが決して問題とせらるべきものでなく、寧ろ信仰に依てそれらを超越して進んで與へられた使命しめいに一路邁進まいしんすべきことを指示して居るのである。この一切を超越して然かも當面の仕事に邁進して行ける信仰こそ、道徳以上であり哲理以上であつて、それはひとり戦争の場合のみには限らないのである。無論道徳を無視する譯でなく、理論を無視する譯でもない。道徳以上でなり理論以上である信仰的「諦觀」の上に、小道徳や小理論を消し飛ばせて、却て大道徳大理論に直參ちくさんせしめて行くものである事を示唆して居るものである。

編輯室だより

◇初冬です。陽光が益々温かさと懐しさを與へて呉れる時です。東海の空を銜いて昇る太陽が人類全體にもこの温かさと親しさを與へるために、妖雲を銜いて昇りつゝある時代でもあります。國民の精神的分野を受け持つ、吾の銑後の任務の一層重大なるを思ふ可き秋です。

◇で、本號の特輯には、念佛部隊、今様蓮生坊鷹森部隊長、突撃説法佐藤中尉を聚録して、信仰と皇軍の攻撃精神とがどんなに深い因縁に結ばれてゐるかを事實によつて、示さうと試みました。きつと皆さんが感銘して下さること、信じます。

◇その他、戦線に、銑後の守りに、深い信仰が生かして行つた数々の美談は澤山にあり、皆さんの周囲にも無數の實例が美しい華を咲

かしてゐること、思ひます。本誌はそれを世に發表し、生きた信仰の實例を以て世に訴へたいと思つてをります故、皆さまもさう云ふ實例を御遠慮なく本誌に御投稿下さい。

◇「淨土」を戦線の勇士達に澤山送つた事は前回のニュースに報道いたしましたでしたが、戦線からは澤山の禮狀を頂き、いづれも潑刺たる闘志に漲つた通信で、非常な感銘と心強さを與へられ、私共の任務の一層重いことを痛感させられました。

◇新年號は、特輯物を満載して新春初頭に新鮮の氣を漲らしたいと、目下懸命に活動してをります。兎に角、本誌を以つて淨土も第三年を終り、愈々第四年に向へることになるのです。思へば今年は多事な年でありました。來年は更に多くのことどもが私達を待ち構へてゐることでありませう。

今の中に確り腹をこしらへておかねばなら譯です。淨土もまた一段の飛躍を遂げて、精神報國の誠をいたしたいものと思ひます。

皇軍の武運長久、東洋平和の速かに來つて平和の鳩の翼をひろげる時の一日も早からんことを祈りつゝ、今年最終の御挨拶を申し上げます。(大木)

◇本誌上に長い間美しい挿繪を書いて下さつた玉井徳太郎、福田勇の兩畫伯が出征なさいました。兩氏とも彩管とる手に銑劍を握つて、皇國のために懸命の御奮闘を續けてをられることでありませう。兩畫伯の繪を充分掲載出来ないこととは、私共にとつて非常に残念なことですが、これも亦國家のために當然な義務であり權利であります。庶幾武運長久にして、再び誌上に健筆を振はれん日の一日も速かなんことを。

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年十月三十日印刷納本
昭和三年十二月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園四丁目二番
振替 東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢 (送料一錢)

一ヶ年 金一圓 (送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

布教用書に最も良し

念佛讀本

念佛とは何？ 六字の名號の中に籠る信仰の眞髓は何に？
第一線に活躍する教界の指導者が、凡ゆる角度から念佛の現代的意義を説いた教化の最前線に立つ書！

内 容

生	中村 辨康
死	佐藤 賢順
佛	大野 法道
本	眞野 正順
信	石井 教道
念佛の集ひ	笹本 戒淨
社會生活	島野 禎祥
女 性	江藤 漱英
家庭生活	佐藤 春夫
念佛の意義	椎尾 辨匡

菊判一二頁・オフセット表紙付
本文五號總ふり假名付
廿三錢 (送料共)

講 話 一枚起請文

法然上人の「一枚起請文」が淨土宗教の精髓を盡したものであるのは今更不言を要しませぬ。この簡潔流麗な御一文の中に籠る本當の信仰精神を著者の豊富な體驗と該博な智識に基いて、易しく詳はしく説いたもので、これによつて毎日皆様がお讀みになる「一枚起請文」の正しい意味が、生活に即して、はつきりと解ります。目下非常な好評で、寺院、諸團體から布教用、教化用として多數の注文に接してをります。 定 拾三錢 (送料共)

多部數購入者への特典

團體、個人を問はず本書を一時に十部以上御購入御希望の向には一割引(九錢)とし、送料は當方にて負擔します。但し代金引換郵便はお断り申します。切手代用は一割増しに願ひます。

發行所

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十二年十一月廿日印刷納本昭和十二年十二月一日發行

淨 土 第三卷 第十二號

定價金十錢 (送料一錢)